
Last Innocence

碧海ユズ吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Last Innocence

【Nコード】

N8472Y

【作者名】

碧海ユズ吉

【あらすじ】

『明日世界が滅ぶんだって——』

冗談のような本当の話。

遠未来の地球。

人々は戦争で汚染された地上から逃げるようにして、都市型地下シエルターで暮らし、時代は衰退期を迎えていた。

あるとき、明日世界が終わってしまうと観測される。それに気付いたのはたった数人。

画描きの少年・機工士の少年・音楽好きの少女・携帯星間ラジオを

持つ少女。

四人の子供達は全盛期時代の人々の痕跡を求めて危なっかしい探検に出かけることにした。

古い照明灯の光とガスっぽい埃に包まれた世界と外に想いを馳せる、少年達の最後の一日。

この作品は個人サイトで公開されている作品を転載したものです。

星がくれた、終わりの始まり

「知ってる？ 明日、世界が終わるんだって」

遙か高みは天井に覆われ、無機質な鉄骨と変色したコンクリート、特殊な緩衝材によって作られた広大な地下都市。

すっかり地面の中に馴染んで、機械のコードや階層化されたスペースやそこを渡るいくつもの懸架で、都市は雑然に雑然を重ねて混沌としている。

その雰囲気はほとんど無法地帯だ。しかし、仕切る組織は存在している。

あちこちにスラムのように建てられた居住区や店からは煙が立ち上り、排気が間に合わないのか都市の中はいつも白と黄みがかったガスがぼんやりと漂っている。

それは多分に、『空』に取り付けられた太陽代わりの照明のせいもあるかもしれない。あまりにも何百年と年季が入っているものだから、光すらも純白ではなく黄ばんでいた。

都市の中で生活する人間も多種多様で、染み一つ無い綺麗な服装をしている者は基本的に見かけない。ラフな格好が標準で、働くにしろ遊ぶにしろ、とりあえずなにか着ていればいいという観念が強く働いているのだ。

それだけ流通する物資は貴重品であり、住民達にとっては共有財産と呼べるものだった。

外からの定期的な物資援助を受けている以外は、自給自足でなん

とか成り立っているこの都市は、ただの道楽で作られた都市ではなかった。むしろ逼迫したさなかに作られた、人類の棺桶とも言える。

都市型地下シェルター『ペイシエントケイヴ3』。それがこの都市の名前。

一時的な避難所として計画された場所だったのも最初のこと、今ではすっかりこの地下都市こそが残り少なくなった人類にとっての星であり、国となった。

簡単な話だ。大昔にここより上の世界、地上と呼ばれる地で大規模な世界大戦があった。

土地の資源やら権利を奪い合い、権謀術数に染まったドロドロの戦争は空・大地・海を徹底的に汚染し、到底人が住める場所ではなくなっただ。

なし崩し的に終わりを告げた、なにが大義だったのか分からない戦争。

残された人達はかろうじて各地にある都市型地下シェルターに逃げ込み、そこで第二の世界を創り上げたというわけだ。今でも、緩やかに人口が減少しているはず。

それでも、世界大戦を大昔に起きたことと流し、命が何世代も続くほどには、時間は流れている。

人々が、空というものや海というものを、知識の中でしか知らずに過ごすほどには。

そして現在に至り、時間は朝。繁華街と呼ばれる人通りが多い場所の一角にある一軒のラーメン屋。龍の腹と書いて『ロンフ』と呼ぶ店。

そこそこ客の入ったラーメン屋の暖簾をくぐってすぐの、カウンター前の席に、二人の少年がいた。

街に充満する油臭いガスの匂いにもすっかり慣れた様子で、ラーメンの丼を片付けている。朝から重いものを食べているが、味はさっぱりした魚介スープ。

カウンターに置かれたガタのきたラジオからは有名曲『アメイジング・グレイス』のピアノBGMが流れている。都市内に無断で作られた海賊ラジオスタジオが受信先。

そんな時に聞こえた一つの言葉。

「知ってる？ 明日、世界が終わるんだって」

ん？ とその言葉に反応したのは、十四歳の少年だった。焦げ茶の髪に、珍しい紫の瞳。

肌が生白いのは少年に限ったことではなく、この都市シエルターに住んでいるものはみんな白い。それは綺麗な陶磁器のような白さというより、虚弱体質な白さを思わせる。

箸（割り箸ではなく、無個性の箸で使用後は洗浄してまた使われる。珍しいことではない）とレンゲの手を止めて隣席を見れば、もう一人の少年がいる。

緑の目をしており、同じ焦げ茶の髪の上から黄色のバンダナを巻いている。歳は十五歳。紫の目の少年より一つ年上だが、親しい友人付き合いをしている。

そのバンダナ少年は明日の天気話を話したようなニュアンスで、食べる手を止めていない。

だから紫の目の少年はいつもの冗談だと思った。失笑を隠しもしない。

「なにそれ、未星（ミホシ）の世界終末論に感化されたわけ？ つまんないよ」

「ちげーよ南散（ナチル）、本当に終わるんだって。明日、世界が」
倒置法で強調されても、南散と呼ばれた紫の目の少年はまだ信じ

られなかった。

真剣な顔で正面から顔を突き合わせ、「明日……世界が終わるんだ」と超シリアスに宣告されていたらちよつとは真面目に考えたかもしれないけれど、どう見たって隣の少年は片手間感バリバリだし、世界が終わることを絶望的に憂いているようにも見えない。

未星の戯言につられたのかと思うのも、無理はなかった。

未星はいつも「明日世界が終わるよ」と風鈴のような繊細な雰囲気と共に吹聴しているからだ。とんだピエロ、とんだ嘘つき女。嘘つきを通り越してもはや彼女の個性になっているが。

ただ南散がこの話題の続行を選んだのも、ひとえに隣の少年がこれまで一度も世界終末論を唱えたことがなかったからだ。一緒に未星の冗談を笑っていた側だったのだ。

「どこ情報？ まさか未星なんて言わないよね、依都（ヨリト）」
麵を嚙りながら尋ねると、依都と呼ばれたバンダナ少年は箸で虚空をつつくように記憶の波を掻き分け、しまいにはトントンと持ち手の手根骨で頭を小突く。

「未星だったら笑って済ませてた。情報源はへ才爺さん」

へ才・ス才爺さんは、この地下都市の物資の流通や治安をまとめている組織『レムナント』のご隠居だ。

レムナントは莫大な権力を持った者達、というより頼れる兄貴分でありリーダーといった庶民的な印象が強く、住民達にとって身近な治安組織。

物資の積み卸しもしているので、レムナントに入ればチョコレートや飴玉がたくさんもらえる、とはよく子供の頃に抱く発想。物資を調整しつつ公平に分配することがプロトコルとして定められているのを知るのはそう遅くない。

そしてへ才爺さんは、レムナントで長く活動を続け、今では現役

からしりぞいて助言役に徹している。外の世界のこともよく知っているし、色々な知識の収集に興じている好々爺だ。この世界で知らない者はいないというくらい彼の存在は知れ渡っている。

もちろん、南散や依都にも優しく接してくれるお爺ちゃんだ。

「いつも通り、爺さん愛用のラジオコンポを修理しに行つてたらさ、『いいことを教えてやろう』って笑って前置きして言われたよ」

「なにその後ろ向きなポジティブ観」

へ才爺さんの感性も不思議で、言い回しも少々奇特だ。楽しくないのに楽しいことと言ったり、泣いていないのにもつと泣いても構わないよなんて言ったり。

まるで人が被っている面の皮をすり抜けて心の奥に触れてくるような感覚。決して不快ではなくて、もつと色々自分の中から引き出してくれないかなって思ったりした。

「へ才爺さん、気晴らしに物資運搬所で外の人と話すだけどさ、その際に世間話で秘密裏に聞いたんだとさ。銀河連邦の人達の情報だから間違いないよ」

外の人間が物資を運んでくると言っても、それは地球外生命体のことを指している。地上に人はいないのだ。ペイシエントケイヴ3に有り難い物資援助をしてくれる人達は、宇宙船に乗ってやってくる遠い銀河連邦所属の職員達。

素材は基本的に、世界大戦時に他惑星に生体サンプルや機工技術を持ち込まれ、そこで樹木やそこから成る果実、野菜、穀物、それから牛や豚、魚、鳥などを養殖されたもの、紙やペンなどを精製したものの、それぞれ動物と静物を送ってもらっている。他惑星のものと、この星のオリジナル体から抽出したもので物資は構成されているのだ。

地下都市内でも商売や創作ができるように、例えば服の場合は布や綿といった原料ものも含まれる。それを作る機械も支給対象だ。都市はもはやただの避難所ではなくきちんとした生活体系を持ったコミュニティ。ただ与えられるだけでなく、交易などの活動をしなければ急速に廃れるのだ。

もちろん、許される限りではペイシェントケイヴ3で育てているものもある。

銀河連邦の人達は、この星が自浄化されるのを、待っていてくれるのだ。

他の星の人達にしても、ブルーグレイスはとても綺麗な星だったとか。

どんな風に綺麗なのか、地下に住んでいる南散には分からない。

それが明日、終わるといふ。これはまた急な話だ。

「えーっと、なんだっけ？ なんとかの雲ってこの天体が活発化して……あれ？ その前に宇宙に星が増え過ぎて？ とにかく、彗星がこの星に衝突するんだってよ。この星の時間に置き換えると、明日の朝七時。丁度今から二十四時間後だな」

「アバウトだね」

「結果だけ知ってりゃいいんだよ」

なるほど、天体関連ならばこの星を観測している銀河連邦の職員が知っているのにも得心する。

しかし彗星ならば、銀河連邦御用達の戦艦で破壊できないのだろうか。ブルーグレイスが耐用年数に達して消滅するのなら、お手上げだけだ。

それを指摘すると、依都は他人事のように処理して現状を述べる。

「いくら自浄化を待ってるって言ったって、地下に人が籠もってる吹けば飛ぶような星だぜ？　いつでも見限れる星だ。そして今回落ちてくる彗星ってのは一つじゃないんだ、もうそれは流星。大流星だ。たくさんの巨大な星が雨みたいに叩き付けてブルーグレイスを砕く。とてもじゃないけど、銀河連邦にも庇いきれない事態なんだよ。向こうでも救済の断念が正式に発表済み。……って、へオ爺さんが」

「ふーん……………そつか。たしかに死に損ないの星だからね。どうすることもできないなら……………仕方ないか」

雨か。南散はそれを絵本や遺物のノイズにまみれた劣化映像でしか見たことが無い。

たくさんの線が空間をまんべんなく埋め尽くすというのが、その流星にも当てはまるのなら、すごいのだろうとは思うが。

実物の見聞に乏しく、知識だけの概念でしか話せないのは、この環境に生まれついて当たり前のことなので苦痛ではないけれど、だからといって興味が無いわけではない。

想像の翼は弱くとも羽ばたく。

とりあえず、ちゆるちゆると麺を啜る。美味しい。このラーメン屋の常連であるおかげで、ご贔屓にしてもらい、出てくるラーメンにはなんとチャーシューがもう一枚おまけしてある（普通は糧食の関係もあって一枚か、チャーシュー自体が無い）。

その内の一枚を口に運ぶと、ジューシーな味が口に広がって食欲がもっとわく。あー、食べるって幸せ。

「このこと、ケイヴのみんなは知ってるの？」

「知るわきゃねーだろ、知ってどうするんだよ今更」

一理ある。

では世界が滅ぶことを知ってしまった自分達はどうか過ごせばいい

のだろう。

これだけ情報があるならば、信じるしかない。滅ぶのだろう。二十四時間後に。

残された時間はたったの一日だけ。

冷静でいられるのは何故だろうか。慌てたり、錯乱して自殺してもおかしくないのに。

何となくしっくりきたからかもしれない。未星がいつも世界が終わると言っているから慣れてしまったのかもしれない。いつか終わる日が来るんじゃないかって、自然とそんなことを考えてしまうほど彼女の声は言霊を秘めていた。

それとももう絶望しているのか。……それは無いか。

絶望していたら、今こうしてラーメンをのんびりと食べていないと思う。美味しいだの、チャーシューをおまけしてもらえて幸せだのと思っていられないだろう。

そういうものなのだ。終わるのなら、終わるんだ。どうしようもないなら、慌てても仕方ない。

子供教室でかなり無茶な宿題を無茶な期限で出され、当然みんなが未提出で、あとは先生に怒られるのを待つだけだったときと似ている。

インスタントラーメンで三分を大幅に過ぎてしまい、結局のびてしまったラーメンを食べるしかなかったときとも似ている。

どうしようもないこと、慌てても仕方ないこと。そういうものなのだ、と。

でもちよつともつたいないかも。世界が無くなるの。

今更ながらに、カウンターのの上に置いてある、店のラジオが流す曲が耳に届いた。

歌無しの、ゆったりとしたピアノ調のアメイジング・グレイス。
ボロラジオのせいか元々の音源が悪いのか、少しひずんだ音色だが、耳心地がいい。まるで歌詞が聞こえるようだ。廃れてしまった
全盛期時代の言葉。

アメイジング・グレイス　なんと美しい響きであることが
私のようなならず者までも　神は救いたもうた
盲目な私だったが　今まで見えなかった神の恵みが
今は見える

己のため、欲望のため。なんて醜いことか。色々大変なことが交錯した末に戦争をした人類の子孫である自分達。

もし神様がいるのなら、そんな罪深き自分達でも許してくれるだろうか。

許さなくても明日死ぬけど。許されなかったから滅びるのか。もし天国があるなら、良いところに行きたいよな。友達みんなで。危険思想っぽいが、もし死んだらどうなるか、怖いけど興味はあり、それは明日に迫っているのだからまかり通ると思う。

神様がいるかどうかはかなりどうでもいいけど、この曲は好きだった。

心が洗われるような、花の香りのする綺麗な場所に連れて行ってくれるような、そんなところが好き。

最後の一日、今日はなにをしようか。

『空』のキャンバス

「じゃあ、依都はどうすんの？ 溜めたお金、ここで全部使い切っちゃう？ 店から機械をたらふく盗んでストレス発散に壊す？ それとも、好きな女の子に迫ってイチャイチャする？ 明日滅びるなら、前科がついたところで痛くもかゆくもないよ」

「俺を勝手に犯罪者にするな。っていうか途中から教唆するな」

薄い緑色の瞳を半眼にして、だがすぐにフラットに戻した。食事の手を止め、使い古したウエストポーチから何かを取り出す。それは南散にとってもよく見かけたもの。

黒いボディに薄型長方形のフォルムをした携帯ゲーム機。

全盛期時代のものではなく、それ以降の衰退期に作られたもので、2Dのカラー画面とカチカチと鳴る固いボタンが付属していた。

機械好きにしてゲーム好きの依都の心ばかりの娯楽品だ。

「『^{シング・スプライト}妖精達』。まだ全部の音階楽譜を集めてないんだよな、チート使うのも邪道だし、悔い無きようにフルコン目指そうか。風の妖精タンの歌は好きだから全部集めたけど」

「タンって……僕はこういう反応をすればいいの。第一、前に見せてもらった時はそんなメルヘンチックなゲームしてなかったじゃないか。もっと、クリーチャー同士を戦わせる冒険ものだったような気がするよ？」

「あれはもうグレイトチャンピオンになるっていうクリア条件に到達したんで、やめた」

「依都の心の方性が見えないよ。見えなくてももうよくなってき

たけどさ」

ギャルゲーもあるぜ、と満面の笑みで言われ、なんとも形容しがたい表情でそつと目を逸らす南散。最後の日になんてものを見たんだ自分。変わり果てた親友の姿を、この目に焼き付けることになるうとは。

「俺のことは置いといて南散はどうするんだよ。今日もヴィーするの？」

「ヴィヴィッド。いつも整備しているものくらいちゃんとした名前で言つてよ」

「なんでだよ」

南散はカウンター下の荷物置き場用のスペースに手を突っ込み、置いてあったものを引っ張り出した。ガタガタと固いものがぶつかり合う音が小さく立つ。

出てきたのはA4サイズのタブレット型キャンバス。厚さは二センチほど。

表側に黒く沈黙したディスプレイがあり、白と水色の外殻でカバーされている。隅っこにはペン型のポインティングデバイスが収納され、取り外しができるようにになっていた。

グラフィックメカニカ：製品名『ヴィヴィッド』。全盛期時代の産物であり、栄枯盛衰の果てにペイシェントケイヴ3に流れ着いた骨董品である。

南散は画を描くのが好きだ。それで少ないお金を稼いでいるくらいに。これでも似顔絵を描いたり、画を売ったり、頼まれて壁や路道に描いたりする、ペイヴメントアーティストの端くれ。

下手くそだった頃から欠かさず描き続け、今ではそれなりに色々描けるようになってきたと思う。南散の画を、好きだって言うてく

れる人もいるし。

骨董品なのでバッテリーの入手や整備にかかわる手入れは依都に手伝ってもらっている。というより、たまにある整備の方は機械いじりが得意な依都に完全に任せっきりだ。

もちろん紙に描くこともあるが、大体はこのヴィヴィッドで作業し、これまた入手してきた転写機で紙媒体や映像機器に画像を送るといった具合。

外殻があるくせにデリケートなので、あまり乱暴な扱いはできないのがネック。

これが南散の愛用品だ。

起動すると、【Welcome to the world of the creation.】と表示され、作業フェーズに移る。

閲覧モードにして、これまで描いてきたイラストをサムネイル一覧表示。ペンで特定のイラストをつつくたび、それが画面一杯に広がっていった。

その気になれば、2Dホログラム化して立ち上げることもできる。間近に気配を感じて隣を見れば、すぐ横に身を寄せ合うような形で依都がディスプレイを覗き込んでいる。最初は見られるのも恥ずかしかったが、今ではすっかり免疫がついた。

「この生き物はなんだ？ どこに目があるかわかんねーな」

「これはジャイアントパンダ。大熊猫っていう種類。ずっと草ばかり食べてたんだって」

「じゃあこの生き物は？ すげー綺麗な目えしてる」

「これはキリン。麒麟っていう幻獣の方ではない、実在した動物。

これは頭だけだけど、本で見ると首がすごく長いんだ。ほんと、信じられないくらい長い」

「じゃあこれは？」

「これは世流依都（セリユウ・ヨリト）。空調浄化装置を直しているところを、僕がスケッチした」

「だよねー。どう見ても俺ですねー。――削除しろ」

「何をいまさら物件でしょう、どう見ても」

言いつつ、南散は素早い手つきで終了スイッチを押した。

画面に浮き出たのは【Good bye.】の文字。

あー！ と叫ぶ依都をよそに、無情にもヴィヴィットの画面は暗転し、沈黙する。

「あとでメモリチップいじって消そうなんてことしないでよね」

一応釘を差したし、向こうも勝手に消す真似はしないだろう。もっと恥ずかしいことを言うなら、わざわざ鏡を見て、自分の自画像も描いているのだ。

まだ色々と分からなかった頃、知り合いの人物画やペイシエントケイヴ3の風景、創作画がたくさんある中に、自分だけがないのが寂しい気がしたから。

もちろん自画像はさせないし、見つかったらナルシストとか言われそうだからファイルにパスワードを掛けて隠す。

「描いたものって、本の中で見た写真や図解から得た知識をもとに描いてるから、実物を見て描いたりするのって、貴重なんだよ。見て聞いて、それが架空の風景を創作することにも繋がっていくし」
それでも、やっぱり想像も含めて色んな形で色んなものを画に起こすのは楽しい。そのため、メモリチップにはたくさんの画像が保存されている。

保存枚数は三桁強を超える。

下手な画、自慢の画、どれも南散にとって大切な世界。

朝食を済ませたあと、南散と依都は近くの朝市にやってきていた。中規模だが始まりから終わるまで人の行き交いが絶えない場所である。

地下であつても照明灯から商品を守るため、飛蓋に骨組みがついた露店がズラリと並んでいた。

食材、衣類、小物、骨董……種類別に分けられているので、歩いていると店の様相が移り変わり、小さな街並みを眺めている気分だ。

その食材エリアの一つの露店、青果屋の前に二人はいた。

保存食に加工したものが多く、汁気のある新鮮な果物を、南散は一つ一つ品定めしている。リンゴのコーナーに目を留め、手にしては質を見て、戻していく。

やがて満足のいく質を持ったリンゴを二個選ぶと、店主にお金を払い、袋詰めされたリンゴを受け取る。南散はお礼を言い、依都を促して再び市場の通りを歩き出す。小脇にはホルダーに収まったヴィヴィッド。持ち歩くにはちよつと野暮ったいが、抱えるよりマシ。

歩きながら、南散は袋を隣の依都へ差し出した。

「ほら、僕の奢り。一個取って」

「さんきゅー。南散の目に狂いはないからなあ。なんたつて紫だもんな」

「紫は関係ないよ。珍しいってだけで」

しかし依都は紙袋からリンゴを取り出すと、小振りだが傷一つ無い紅玉を眺めて、

「でも俺、お前の目、好きだぞ」

事も無げに言ってから一口嚙った。美味しいからか、それとも別の意味か、依都はこちらが恥ずかしくなるような満面の笑みをくれ

た。

「だって、綺麗じゃん。誰も持っていないようなものを持ってる、それってなんか好き」

あまりにもあっけらかんと告白されるので、南散は照れ隠しにボソツと「そうかなあ……」と言葉を濁し、自分もリンゴを取り出してもそもそと囁る。

甘酸っぱい味が口内に広がった。瑞々しくてデザートには丁度良
い。

これまで依都に、すげー、とか言われたことはあっても、好きだ、と言われたことは無かったので余計に恥ずかしい。そんなこと今頃言わなくなっていていいじゃないか。

誰も持っていないようなものを持っていることに、憧れを抱く気持ちは分かる。それに近いものを、南散は目指していた。誰でもできることじゃないところ。

画を描き続けてきた南散が、いつも見ていたもの。

「依都、僕さあ……やってみたかったことがあるんだよね」

「おっと、心残り？ やってみろやってみろ。居住区の壁に『世界さんマジばねえ！ 心の天空永遠に消ゆ』とかカラスプレーで片っ端からラクガキ？」

「錯乱自殺よりひどい錯乱だね。方向性が違うよ」

さらっと否定してから、南散は『空』を見上げた。

小脇に提がるヴィヴィッドに、そつと触れる。その手にも力がこもる。隣で依都も同じく見上げてくれているのだと気配で察しながら、南散はそれを眺めた。

南散達にとつての『空』。高みに存在する広大な天井。それは最初、無骨なだけのものだったそうだが、今では人の手が及んだ『作

品』となっている。

ここにいる者なら誰もが知っていること。

誰が思いついたか知らない悪ふざけ。『そうだ、あそこをでっかいキャンバスにしよう』。

天井は擬似的な青空で塗り潰され、そこに歴代の画描きたちがグラフィカルな画を残していった。

馬に乗り槍を持った英雄、ラッパを吹く天使、羽の付いた魚に弓を引く悪魔、角を生やしたモンスター、グルグル太陽と白い花、アンテナを抱き締める女の子――。

好き勝手に描き散らしたたくさんの画が、『空』を翔ける。

どうやってあの天井まで手を伸ばせたのか分からない、何百年も前の画。それらが、照明灯の黄みがかつた光に照らされ、あるいは陰になって浮かび上がっている。あの『作品』の全貌を見渡すことはできず、ここからでも、一部の絵画が見えるだけだ。

それくらい『空』は広く、描かれた画は巨大で、時代と同じく神秘的な悪ふざけだった。

その悪ふざけに、南散も参加してみたかった。持てる全力を使って、じかに大きく描いて、夢中になって……。

「なに描くか、決めてた？」

静かに依都に問われ、遠いものを見る目をしていた南散は、うんと相槌を打った。

「渦巻く空の道と、その入り口に立って見上げる男の子」

「……ん？ 空があるのに、また空描くのか？」

「ベースの青空に馴染むようにして、渦巻く空を描くんだ。雲っていう気流、それが何重にもトンネルみたいに渦巻いて、空の彼方に続く道を作っている。彼方にあるのがなにかは分からない。でも道の向こうはキラキラ輝いていて、それを入り口から少年が見つめて

いるんだ、『ここからどこへ行けるんだろう』ってね」

何百回、何千回と心に描いてきた構図と色。何枚も何十枚もヴィ
グイッドに下書きファイルがある。あれこれ考えるのは楽しくて、
目を閉じなくても、浮かんでくるほど。

男の子の背中、不安がありながら期待も抱いていて、空のトン
ネルとその向こうへ想いを馳せ続けているのだ。

「なんで男の子？ 『空』の画には、女の子が多いが……」

「アリス・イン・ワンダーランドって知ってる？ 古い古い全盛期
時代の童話なんだけど。女の子が木のトンネルを通って、不思議な
地下世界を冒険するって話。面白いんだよ。だから、僕も『空』に
打ち上げる画なら、空の向こうへ冒険する画を描きたくなった。地
下世界を冒険する少女の対極だから、描く人物は少年」

好きなことを喋り出すと、止め処ない。どんな気持ちで思い描い
てきたか、どういう色を使おうか、どんな意味を込めようと思っ
ていたか。色々語り聞かせたいのに、全部話してしまうと、話した
ぶん自分の中から水のように零れていってしまいそうになる。

自己満足は自分の中だけに留めておこう。それは他人にとっては
価値が無いものだ。

そして、自分があの『空』に空のトンネルと少年を描くことは、
もう不可能だ。

「紙が今よりももっと貴重だったっていうのもあるかもしれねえけ
どよ。あの天井を一つの共同キャンバスにするって考えたヤツはバ
カだな」

「バカと天才は紙一重なんだよ、依都」

そう、あの広い天井をまるごと画に使うとするなんて、バカで、
天才だ。

天井に画を描くことは、遙か昔からあった発想。けれどもなにもそれを地下都市の天井で実行に移すなんて、本当に馬鹿げている。その結果、まるで本で見た星座の天球図みたいになってしまった。いつの時代にもバカはいる。誰かが実行に移して、天井一面を青く塗り潰して偽物の『空』を作ってしまったように。南散はただ感嘆の溜息をつくしかなかった。

そうなのだ、あの偽物の『空』から、全ては始まっている。

本物の代わりに広がる偽物の『空』。青く塗り潰された天井。それは本物の空を見たことが無い南散の好奇心を、激しく駆り立てる。想像の翼が羽ばたく。空の向こうへ行こう、と今にも南散の心連れ去ろうとする。

ああ、と隣で依都が深い溜息をついた。チラと彼を見ると、依都は眩しげに目を細めて見上げていた。

「あの青誰が描いたんだ、目に痛くてしょうがねえ」

鉄塔と少女と星間ラジオ

冷たい風が絶えず吹き抜けていた。高い場所にいれば、それだけ天飆が建物を軋ませる。

口をすぼめて吹いたときに出る細い遠鳴きの音が、何十倍も重なり合って走り去る。

建物の残骸で埋め尽くされた高台、その一際高い、今にも崩れてしまいそうな朽ちた鉄塔の見晴台に、彼女は座っていた。

鉄骨に寄り添い、少しでも風から身を守るように膝を抱える。

くすんだ水色の髪に灰色の瞳、病的な白さを持つ肌。スリッパドレスのような軽装。十代前半ほどの少女だった。寒さに震えている様子もなく、淡泊な存在感をしている。

少女は風の冷たさを感じ、その鳴き声を聞き……ある音を聴いていた。

足下には古びた紐付きの小型ラジオが置かれており、ザーザーと雑音を吐き出している。全盛期時代の骨董品と呼ぶべき代物で、星の向こうの放送電波も受信することができた。

少女の纖手がそつと筐体のチューナーを回し、周波数を合わせた。

ザザ————　　ザザ————　　ザ、ザザッ……

初め雑音だけを吐き出していたのが、段々と音を拾うようになってきた。ノイズと誰かの喋くりの音が混ざり、段々とノイズを侵蝕して、声が鮮明になっていく。

『——の味は病み付きになるよね、リスナーの皆さんも、ぜひご賞味あれ。さて、次のメールに行きましょうか。ベリーネーム【プリズムドロップ】さん、……ボクの夢はパイロットになることです。星の海をコスモシップで飛びたいと思っています。ボクの住んでいる星はガス雲で覆われているので、いつかキラキラ光る天の河を飛んでみたいです——』

少女の口元が微かに弛み、灰色の瞳が穏やかに閉じられた。鉄骨に背を預けてジツとする様は、永遠に眠る死体のようだ。

誰一人いない世界、静かな世界に一人きり。

静かであればあるほど、とても広く感じられる。それを今、彼女は独り占めしていた。

誰もここには来ないからだ。

もったいないことをしていると、ここに来ないみんなに対して彼女は残念に思う。

こんなに綺麗なのにね、と少女の唇が動いたとき。

それまで聴いていたメールコーナーが終わり、特別ニュースに切り替わった。

ちなみにこのラジオ放送は、この星系も放送範囲内で、ブルーグレイス人にも分かる宇宙公用語の一つを使っている。

『とても、残念なお知らせです。一部の人はもう知っているかもしれないけど……ブルーグレイスという星を知っているかい？ 僕も映像でしか見たことがないんだけど、とても綺麗な青をした星なんだ。知らない人のためにちょっと説明すると、水の膜に包まれた星でね、戦争で汚染されてしまって今は自浄化を待っている、傷ついた星なんだ』

ブルーグレイス——私達の星。古い名前を、地球。異星間に通ずる名前だ。

『そのブルーグレイスが、明日、崩壊する』

少女の瞳がうつすらと開いた。それまで微睡んでいた瞳をぱつちりとさせ、少女は壁から背を離れた。身を丸め、ラジオのポリウムをゆっくりと上げる。

耳に馴染んだノイズ混じりのパーソナリティの声が、落ち着き払った声色で告げていく。

『それは何故か。……ブルーグレイスがある星系には、オールトの雲という天体群がある。その中では天体が互いに摂動しあって保たれているんだけど、宇宙に質量が増えていくにつれて、オールトの雲でも天体が増え始め、絶妙なバランスで保たれていた動きが乱れたんだ。』

複雑な軌道を描くようになり、しまいには太陽の引力につられて大きく軌道を乱した。その際に、ブルーグレイスの重力に吸い寄せられ、天体の破片が数多の彗星となって落下軌道に入ってしまった。……それが、ブルーグレイスに衝突すると予測が出たんだ。まさしく雨の弾丸のような勢いでね』

少女はじつとラジオに耳を傾けながら、鉄塔から見える風景を見渡した。

『誰にも止められない。だから、あの星はもう、滅びてしまう。ブルーグレイス時間にして、あと一日で』

最近の宇宙における質量増加は……と、そのあとも色々と宇宙に対する懸念を、なるべく深刻になりすぎない適度なしゃべりで続け

ていくパーソナリティ。けれども、少女の耳にはもう遠いBGMでしかなく、ほとんど入ってこない。

ついにはラジオの電源をソツと切る。

ささやかな音さえ無くなって、辺りは自然の音だけになった。陽は少しずつのぼり、ここにずっといれば少女の体を温めてくれるだろう。ボーツとしているのも、悪くない。

だが少女の瞳は、ジツと過ごす小動物の目をしていなかった。感慨深く景色を見つめ、

「……私のようなならず者までも、神は救いたもった。神様も派手な救済が好きなのね」

地上、光の逆光で半分陰を帯びながら、少女が呟いた。

*

子供達がボールを蹴ってわあわあ喚声をあげて走り回る。散歩中の老人や、お喋りする婦人達、のろのろと歩き回るデブ猫、建物の中に生まれた鉄骨仕掛けの公園は、今日も憩いに溢れていた。

地下都市では水資源が貴重でアクセス制限がかけられていることが多い。噴水というものをあまり見かけない。その代わりに、空気清浄機と、微風に設定された送風機が、憩いの象徴として広場の中央に装飾紛いの形で設置されている。

広場は黄ばんだガスを押し退けて、いつも晴れていた。

水と同じくらい、或いはそれ以上の価値となる空気の確保は優先的だ。ペイシエントケイヴ3では空調機の改造・開発・輸入を積極的に行っている。

なんとか排出量を追い抜こうと頑張っているのだ。それもあって

あちこちに設置される。

公園もその一つで、涼しく気持ちの良い風を吸い、浴びることができた。

それらが設置される場所は、風吹き公園と俗称され、親しまれているのだった。

すっかり色褪せたベンチに、南散と依都は座っていた。

依都は背もたれに寄り掛かって、黙々と怠情的なゲームに興じている。頻繁にスピーカーから妖精達のコーラス音が鳴り、そばで聞いている方は微妙に鬱陶しい。

その隣で、南散もまた黙々とヴィヴィッドを稼働させていた。半固化されたホログラムパレットが展開し、そこで色を作ったり保存しながら色を取っていき、キャンバスに置く。

開いているファイルは、市場を歩いていたときに話題になった、空のトンネルと少年だ。

構図や色を置いているが、まだまだ未完成なところもある。あの『空』に描けない代わりに、納得いくまで描いてヴィヴィッド内で完成させようと思ったのだ。

最初こそポツポツと会話を交わしていた二人だったが、やがてそれぞれの作業に没頭していった。傍にいても集中できる人がいてくれるとは、なんて贅沢なんだろう。

そんな二人の少年の髪や頬を、そよ風が優しく撫でていく。

と、不意にベンチの後方、二人の間から、スツと手が伸びてきた。線の細い女の子の手で、細長い指先にはコインが三枚ほど摘まれている。

「おはよう、少年達。ついでに大澄（オオスミ）くんに私の似顔絵、頼んじゃおうかな」

南散と依都が揃って肩越しに仰ぎ見ると、そこには見知った少女の姿があつた。赤毛に橙色の瞳、依都には敵わないがそれなりの長身、姉貴風が吹いている。

依都と同年の十五歳、名をレイチエル。

彼女はイヤフォンをつけ、小型の音楽プレイヤーを起動させていた。集音機能付きなので、イヤフォンをつけたままでも外部の音を聞くことができる。音楽が好きな彼女の愛用品である。

先に反応したのは、大澄くん、と呼ばれた南散だった。一瞬面食らつたあと、すぐに気を取り直す。

「おはよう、レイチエル。ごめん、今、紙持つてきてないんだ。画売りは今日はお休み」

「あら、そうなの。残念。せっかく服を新調したのに」
「ついで、と言つたとおり大して残念がらず、レイチエルは両手を少し広げて身を回した。

シャツに花柄の縁取られたワンピース、下にスパッツをはいた彼女は、確かにそこら辺を歩いている女の子より、お洒落な服を着ている。ほとんど汚れてもない。

「どう？　と言いたげな期待の眼差しを向けられた南散は、即座に感想を捻り出す。

「うん、とっても似合ってる。ワンピースがレイチエルの可憐さを引き立てているよ」

素直に思つたことを言葉にし直すと、なんだか白々しくなった。もうちょつと無難な褒め言葉は無いのかと南散は落ち込んだが、レイチエルには充分満足できるものだった。

「お世辞がうまいんだからあ。で、世流は？　これ見てなにか思うところとか、ない？」

だが、依都は眉間に皺を寄せて目の負担をもみほぐすように指を当てた。

「あれ、俺疲れてるのかな……全然魅力を感じなぶきやあつ」

最後まで言い終わらないうちにレイチエルの鉄拳が飛んだことで発言キャンセル。鼻を押さえて復帰した依都は半眼でレイチエルを睨み、手をヒラヒラさせて意地悪く笑った。

「レイチエルさん。馬子にも衣装のレイチエル・バーンズ。精々着飾ったフリして幻覚的自己陶醉しているがいいさ」

「むかつくヤツだねえ相変わらず。そんなんじやいつまで経っても彼女の一人できないよ」

南散と依都が顔を見合わせるのを、レイチエルは不思議そうに見ていた。

ややあつて依都が若干神妙な顔つきで答える。

「天国に行ける条件が彼女を作ることだったら、俺は今すぐにお前をとっ捕まえてるぞ」

「……遠回しな告白？」

「いや、背に腹は代えられないから。彼女作る時間はもう残ってない」

「はあ？　まるで世流が死ぬみたいない言い回しね。なにか嫌なことでもあつた？」

私で良かったら悩み聞くけど、という姿勢で、背もたれに腕を乗せるレイチエル。

彼女は自分達の中でも親友の位置に等しい。

大澄南散（オオスミ・ナチル）、世流依都（セリユウ・ヨリト）、レイチエル・バーンズ、天近未星（アマチカ・ミホシ）。それがグループになっているというのが、周囲の認識だということを自分達は自覚していた。大体一緒にいるとしたらこのメンバーだから。

今日は冒険しようか。明日世界が滅ぶけど

「レイチエル。明日、僕らがみんな死ぬって言ったらどうする？」

南散の問いに、レイチエルは失笑を零した。依都から聞いたときの自分の反応とまったく同じだった。

「え、なにそれ、未星の個性を真似ようってそうはいかないわよ。大澄くんたちが言っても、なんか、ねえ？ まさか感化されたの？ つまんない」

うわほんとんど自分と言ってることが同じ、と南散は内心で呟き、表では苦笑した。そりやそうだ、誰かさんのせいで友達の間では明日死ぬ系の話は飽食気味のネタなのだから。

南散は間近で顔を突き合わせていて、遅まきながらレイチエルのイヤフォンから微かに漏れる音楽がなんであるのか知った。

奇遇なことに、アメイジング・グレイスだった。全盛期時代から生き残ってきた古い曲の代表格に名を連ねている。そういえばレイチエルも好きだったっけ、この曲。

世界が私達を迎え入れてくれるみたいだ、と前に言っていたような気がする。

「信じなくてもいいよ。レイチエルが好きな方を選べばいい。それでも、明日僕らは消えて無くなるよ。彗星が降ってくるんだって。たくさん彗星だから、流星群だね」

「誰が言ってたの？ それ」

「僕は依都から。依都はへ才爺さんから。へ才爺さんは銀河連邦の職員から。職員達なら彗星の衝突は観測できる。僕らが知ったのは

今朝のことだ」

南散のまっすぐな目から何を感じ取ったのか、レイチエルは茶化した笑みを引っ込めた。

いつのまにか依都はレイチエルに背を向けて座り直し、ゲームを続行している。呑気な妖精のコーラスと、レイチエルの音楽プレイヤーから漏れ出るアメイジング・グレイスが、沈黙を殊更に強調した。

「……ほんとう、なんだ」

「うん」

「嘘とか、冗談じゃない？」

「うん。ケイヴのみんなに情報が伝わってないのは、職員たちの配慮なんだと思う。ただ、僕らは偶然知ってしまっただけで」

「……そっか」

身を起こしたレイチエルは、心ここにあらずという様子でもなく、ストーンと納得の塊を飲み込んでしまった。ベンチを回り込んで、南散達の正面までやってくる。

沈痛な面持ちで近づいてきたかと思いきや、次には依都の手から素早くゲーム機を取り上げていた。

「なにすんだよ！ いまコーラスで五十コンボ決めてたのに！」

抗議の声をあげる依都の目の前には、ニヤリと蠱惑に笑うレイチエルがいた。

「うるさいのよ。人がシリアスやってるときにチャラチャラチャラチャラ。雰囲気ぶち壊し、悲劇のヒロインぶることもできない。罰として荷物持ち決定ー」

「自分のこと棚に上げてなに言うか！ 俺がなにしようと勝手だろ！ 荷物持ち……ってこれから買い物がよ！」

「うん、元々ここで未星と待ち合わせしてるの。ショッピング行こうってね」

堂々とした立ち振る舞いと笑みのレイチエル、どこからそんな快活さが出てくるんだろうと南散は感心した。そういう自分達も、反応は大差無かったのだけれど、女の子はもうちょっとヒステリーになるかと思っていた。

でもそこはレイチエルだった、と言うべきか。彼女もまた未星の戯言でいまいち感情が麻痺しているのかもしれないし、前々から受け入れていたのかもしれない。

とりあえず場をしつとりさせるために南散はフォローに徹する。

「依都は、君に泣いてほしくないんだよ」

「空気読めない警報発令中」。気持ち悪いこと言って誤解招くなバカ」

「せっかく恋愛フラグを立てようとしたのに。たしかに依都は空気読めないね」

「お前だよ」

南散は無視してヴィヴィッドの作業に取りかかった。が、二人から痛い視線が突き刺さってくるので、降参してヴィヴィッドを終了させる。これでは作業にならない。

そんな時、不意にレイチエルが苦笑をもらした。天を仰いだが、いつも通りの変化のない『空』が見えるだけ。

ここから見える『空』の画は、ピアノを弾いている女の子と、周りを踊る音譜の螺旋階段。あの女の子も、アメijing・グレイスを弾いているのだろうか。

「でもさ……未星の言うことが、ついに本当になっちゃったね」

考えてみれば別に驚くことでもない。いつも言っていればいつかは実現する日がくるわけで、それが明日に迫ったというだけのことなのだ。

「地上に人間を送ること結局叶わず、か。昔の人って、この世界が

好きだったんかな」

依都の疑問に、南散とレイチエルは答えられなかった。

大昔の世界大戦、エネルギー資源や土地、利権の奪い合いで、ついにはとんでもない最終兵器まで持ちだした結果、地上には冬が訪れた、らしい。冬はとても寒いという。南散が地下で感じている寒さとは比べものにならないと、ずっと前、子供教室で教わった。

植物は枯れて、生き物は眠りに落ち、空はキンと凍てつく。暗黒期の比喻にも用いられる可哀想な冬。

そんなのが世界中を覆ったなんて、一体人はどこまで罪を重ねたのだろう。

人も世界も傷つけて、後世の人間を地下にずーっと閉じこめて。そこまでして星が懷に抱いたものを奪い取りたかったのバカじゃない、と悪態をつきたくなる。

彼ら全盛期の人間がしていることに、愛情が感じられない。昔の人は、この世界どこか……本当に自分たち人間のことも、愛していたのだろうか。嫌いだったんじゃないか？

しかし……アメイジング・グレイスや、ヴィヴィッドを作ったのは、紛れもないその全盛期の人だ。長くここまで伝わってきたほどの、人類の財産。愛情が無いなら、あんなに優しい旋律を生み出せないと南散は思う。

「昔の人はずるいなあ……。自然も独り占めしようとして、他の国をいじめて、醜いくせに人当たりの良さそうな気持ちも持ってるんだから。僕たちが持っていないものを、たくさん持ってた。僕も、地上を見てみたいよ」

見ればいいじゃない、とは誰も言わない。これも大昔の人のせい。

戦争で汚染されたこの星は、毒素の混じった大気が充満してしまっているという。

つまり地上に出れば毒の空気で肺水腫や肺炎を起こし、心不全になる。昔に誰かが地上に出て、それで亡くなったのをきっかけに、誰も出なくなった。

銀河連邦とコンタクトを取っているレムナントの人達でさえ、地上には出ずにわざわざ職員達に地下まで降りてきてもらっている。

数百年経った今、無謀にも地上に出ては帰ってくるという超身近な奇人を見ると、今はだいぶマシになってきたのかもしれないが、近づかないに越したことは無い。

「全盛期時代の人って、どんなだったんだろうな。冷酷非道だったとか？ 敵の血を啜って生きるヴァンパイアだったとかっ？」

わざとらしく驚の手を形作って怖がらせる仕草をする依都の幼稚さに、今度は南散とレイチエルが呆れた溜息をつく。

なにその安易な発想。子供用の絵本で見る話そのままだ。

「教科書では、唾棄すべき人達だったって言われてるわね。戦争を起こして、地上に毒をまいて、太陽爆弾兵器使って、大自然も人も殺し尽くした罪の化身だったって。やることなすこと、悪魔の所業だったんだからそう言われても仕方ないわよね」

昔の人が戦争なんかしなければ、今頃私たちはここよりもっと広い世界で生きられたかもしれないのに。とレイチエルがぼやく。といっても、それは羨むレベルで、実際に外の世界を知ったら激しい嫉妬に駆られるだろう。

醜いと言われる全盛期時代の人々。

それでいて、色んな物を生み出せた人々。

その血を引く自分達。

「まあ、今となってはもう知るすべなんてないんだし、考えても仕

方ないよ」

南散は達観気味に締め括ること、ほんの少しでも舌を出した興味の獣を鎮めようとした。実際、知る術なんてないし、知ったところで明日には意味を成さなくなる。

まあ、そうなんだけど。というニュアンスの白けた空気が漂った、その時。

「あるよ。私、知ってるよ。ずっとまえに見つけた、秘密の場所」

どこか舌つ足らずな、控えめな光がそのまま声というものを覚えたような響き。

その声に惹かれて三人が一斉に注視した先、鉄骨のジャングルジムの隣を素通りして、一人の少女が歩いてくるところだった。南散と同じ年の女の子。

くすんだ水色の髪に灰色の瞳、スリッパドレスのような軽装に、肩に地味な色のケープを羽織っている。ケイヴの中は突き出た鉄骨やら部品も多いので、肌を傷つけないために上着をきるのだ。依都のバンダナにも、そういう意味合いがある。

風鈴のような繊細の雰囲気纏った少女の首から小型ラジオが下がっている。南散のヴィヴィッドと同じ全盛期時代の骨董品。古い筐体だが頑健に作られた、彼女の愛用品。

未星だった。

「あら、もうちょっと遅れてくるかと思ってたのに。おはよう未星」
未星は生活のほとんどが自分時間で生きているような女なので、待ち合わせの時間もルーズだ。

「おはよう、シェリー。ちょっとやりたいことができたから」
薄い桃色の唇を笑みの形にして、彼女はレイチェルの愛称を呼ぶ。よっぽど親しくないと、レイチェルは愛称で呼ばせない。特に男に

対するガードは固かった。

ともあれ、依都が足を組んでベンチに寄り掛かった姿勢で胡乱げに問いかける。

「やりたいことってなんだよ。どうせなら悔い無きようにやっちゃったほうがいいぜ？ 予言者の未星さん、破滅の申し子さん」

依都の遠慮ない揶揄に、おもわず南散は睨んでから、取りなすように立ち上がった。

「えーと、依都の言うことは気にしないで。別に誰も未星のせいとか思っていないっていうか……その、未星……明日、世界は——」

「終わるんでしょ。しってる」

「……。いや、嘘じゃなくて、冗談でもなくて……」

あつさりと受け入れられたので、南散は彼女にちゃんと言葉の意味が伝わっていないのではないかと心配した。いつも、明日終わる明日終わるって言っているの、今回もその調子で『しってる』と言ったのかと思ったのだ。

違う、違うんだよ未星。軽口のレベルじゃないんだよ、本当に終わっちゃうんだよ……。

だが南散がどう説明したものかと考えあぐねているうちに、未星が言葉を付け足した。

「ラジオでできたよ。明日、世界が終わるんだって。嘘じゃないんだって」

「え」

「ちゃんと、わかってる。だいじょうぶ」

淡々とした言葉だったが、フワフワと地に足が付いていない感覚ではないことから、南散は彼女が現実を認識していることを悟った。そうか、知ってるんだ。彼女も、知った側に立ったんだ。それは不慮の事故ではなく、必然であるように思えて、違和感がない。

「未星は……悲しくないの？ 消えてよかったって思ってる？」

「私がいつも言ってることが、本当になっただけだよ」

彼女は無表情に近い濃度の薄い笑顔で、ただそう片付けた。やっぱり自分達はどっか頭の配線がおかしいのかもしれない。なんでもこの程度と受け止められちゃうんだろう。

「で、そのやりたいことってなに？ ショッピングじゃない、よね。予定変更？」

未星の提案に振り回されるのもまたいつものことだったので、レイチエルも渋々受け流す。未星という女の子には、そうさせるだけの不思議な魅力があるのも事実だった。

彼女は灰色の目を軽く伏せて、ごめんねシェリー、と断りを入れた。

「今日は、みんなで冒険にいきたいの」

三人が揃って怪訝な顔をした。依都に至っては「冒険？」と、おちよくるようなイントネーション。まだ子供だけど、もう子供じゃないんだし、そろそろそういうことから卒業するべきだと思っただけだ。

「秘密の場所。ケイヴの果てにある抜け道からいけるよ。そこに昔の人のものがあって、もしかしたらその中に宝物がねむってるかもしれない。私だけじゃ、手をつけられなかったから、いまもねむってるとおもう」

「でも……ケイヴの向こうって、あぶないんじゃない？」

これまでも探検紛いのことはしてきたが、どれもペイシエントケイヴ3の中のこと。かなり危ないこともやらかしてきたけど、都市の郊外は初めてである。ちょっぴり不安もあった。未星は自分達

とちよつと違うから、危険な場所も行けてしまうのだ。

だが先程持ち出していた話題が話題だけに、彼女の提案は心をくすぐっている。いつもそうだ、彼女は抜群のタイミングでこれだという手札を出してくる。

昔の人が残したものの、まだ誰も見つけたことがないもの。

未星はそばにいた南散の服の袖を掴んだ。細っこくて、南散の力でもあつさり折れてしまいそうな華奢な腕と手指。

「いこうよ」

透明な眼差しで射貫かれ、その唇が一語一語を形作って動く。思わず心が吸い込まれそうになるのだから、時々こわくなる。まるでブラックホールだ。

「世界が終わるから、今日、楽しくやろう」

出た、未星の魔法の言葉。必ず出てくる常套句。世界終末論を唱えたあと、彼女は『だから今日を楽しく生きよう』という主旨のことを口にする。

いつも天近未星は、自分の思うとおりによりに全力で生きていた。ためらうような沈黙をやぶったのは、意外なことに茶化した依都だった。

「ほんとーに全盛期時代の秘密の場所なんだろうな？」

「うん。それは間違いないよ」

「……はあ。なんかむかつくけど……じゃあ、いっちょ宝探しすっか」

よつと、と重い腰をあげて彼が立ち上がる。なんだよ、バカにしたいくせに乗り気じゃん。南散は奇妙な方向に話が転がっていくのを、

置いてけぼりにされた子犬のような気分で傍観していた。

のみならず、

「郊外にいくなら、食糧持ってた方がよくない？ 道すがらにか買ってこうよ」

レイチエルまでもけつたいなことを言いだすのだから、南散は完全にスタートを出遅れた形になる。諦めているのだ、レイチエルもだから妙な感じに順応性が高くなってる。

みんな行く気満々じゃないか、どうして一人でも引き留める役がないの？ それって僕の役目だったりする？

決めたら即時行動、依都和レイチエルはさつさと歩き出していつてしまった。残された南散の意見などまったく聞き入れる気が無い同じ意見だと思っているのか、ほっというもついてくると思っているのか、それともついてこなくても構わないのか。

どれでもお好きなのを想像してくださいと暗示されるのも、いつものこと。

「え、えー……」

途方に暮れた声をあげると、未星がもう一度こちらの袖を引っ張ってくる。さつきより少し強めに。

「南散」

その声は、行くの行かないのという次元ではなく、行くことを前提とした語調だった。早く行かないと遅れちゃうよ、と。未星まで他人の気持ちのプライバシーを無視するのか、と南散は呆れかけて自分の心構えが、スタートを出遅れた、と形容したことを思い出した。……つまりは、自分も無意識に行く気満々だったと。そういうこと。

「……あー。はいはい。行こう」

先に行く二人は自分達がいなかったときは歩調が速い。だから、早く

追いつかないと。

南散は未星のほんのり冷たい手を握って、足早に歩き出した。
地球最後の日。鉄骨と淀んだ空気、埃と古い光の世界。少年たち
の宝探しは始まった。

なんでこんな疲れることを。明日世界が滅ぶのに。
まあ、今日は冒険しようか。明日世界が滅ぶけど。

探検隊と市電

ペイシエントケイヴ3の中にも、移動機械は存在している。なかなか大型のものを開発するには資源も人手も要り、かといって銀河連邦から取り寄せるのも容易ではないため、もっぱらケイヴの中を走るのは原始的だったり、古い乗り物だ。

市内電車もその一つだった。遙か昔からあるオンボロで、あちこちガタがきてキィキィガクガクと悲鳴をあげ、赤かった塗装は剥げ落ちて錆び付いている。

それでも整備士達の手で、家族のように大事に手入れされ、今も現役で運行しているおじいちゃん電車だ。

路面の上に敷かれたレールの上をガタゴトと走る市電の車内、ロングシートが主に占める設計で、古く変色した吊革が振動に合わせて揺れている。

車内にまで僅かに侵入してくるオイル臭い空気を吸いながら、南散は進路方向に向かって左側のロングシートに座っていた。

郊外付近を走る市電なので、幸いにも利用客は少ない。そのおかげで贅沢にスペースを使っていた。

不機嫌そうにゲーム機を弄くる依都と、澄ました顔で音楽に聴き入るレイチェル、それから二人のあいだに挟まれ、膝に両手を添えてまっすぐこちらを見つめてくる未星。

三人揃って身をくっつけ合って仲良く座っているのを、正面に座った南散がヴィヴィッドでさらさらと描き進めていく。ガタゴトと座席の下から響いてくる振動や、オイル臭い空気や、ゆっくりと過

ぎ去るケイヴの景色、見えない感覚も全部画の中に閉じこめていくみたいに。

「……なんかさ、もつと笑え、とか注文つけないのな」

ふてぶてしい態度でゲーム機に視線を落としながら、片手間感バリバリで依都が言う。その割りにはかなり自分の姿勢を気にしているのだから素直じゃない。

折角だから三人並んでね僕描きたいから、と有無を言わずにお願いした南散は、鷹揚に笑って対応。チラチラと正面に視線を向けるが、それは依都ではなく全体像を見ているのでどちらにせよ視線は合っていない。

「依都はそのままだから依都なんだよ、気付いてないの？」

「……」

「レイチエルも。未星も。今はそれが描きたいんだ」

描く手は止まることがない。到着までのあいだにある程度描き上げておきたいので、あまり手を休めなくなかった。

「あの画はいいのかよ、少年と空のトンネルのやつ。時間無いだろ。こんな画を描いてる場合じゃないんじゃないかね？」

「速写モードでいくから平気。画風も淡泊にするし」

「大澄くん、私と未星は可愛く描いて」

「デフォルメ入ってるからみんなカッコカワイイ」

「あ、それいいなー私欲しいー」

「あげられたらね」

「南散、私もほしい」

「応相談」

などと他愛のない会話を交えつつ、南散は何となく頭の片隅で思

う。こうして誰かの似顔絵を描くのも、たぶんこれが最後になるだろうと。

なのに寂しいと思うより、楽しくて仕方ない。空のトンネルと少年の画は悩みながら描き進めていくのがまたたまらない充実感をもたらすが、こうして難しく考えずに筆が乗る状態も格別の喜悦をもたらした。

南散から見ても、左からレイチエル・未星・依都という配置になったのも、彼らしくて好感が持てた。喧嘩仲間の依都和レイチエルが仲良く座っているのも面白そうだが。

と、不意にレイチエルが疑問を呈した。未星の肩に寄り添いながら、こちらを見て、

「ねえ、その画には私達三人しかないの？　大澄くんは写ってない？」

「うん。僕は三人の中に並んでないからね」

なにを当たり前のことを言っているのか。人物や背景の輪郭を整えながら南散が答えると、レイチエルは少し物悲しそうな顔をした。「前から思ってたけど、それってなんか、寂しくない？　あんただけがいないなんてさ」

「僕はいるよ。ちゃんという」

レイチエルが面喰らい、依都が顔を上げて不思議そうな顔をした。未星だけが無垢な無表情でお人形さんのように座っている。その三者三様の反応をじっくり堪能した。

本当に、なにを当たり前のことを聞いているのか。

「画には、視点がある。姿が見えない視点があって、画は成り立ってるんだ。この三人が並んでいる画も、誰かから見た光景なんだよ。これは、僕が見ている風景。三人がいて、僕がいないと、成り立たない世界。つまり。僕はそこにいないけど、ここにいる」

だから寂しくないよ？　と口元を緩めて見つめ返すと、ややあっ

てレイチエルは安堵の笑みで応えた。

紛れもない正面から向かい合って描く世界。みんなと知り合ってから、南散は独りぼっちだと思ったことがなかった。この小さな地下都市でみんなと出会えたことを、みんなを描くたびに心の中で感謝している。

画を描くときは、南散もそばにいる時だ。描いた画の中に、姿は見えなくても確かに自分もいるのだと分かったとき、南散の中からまた一つ寂しさは消えた。

「私たちは、いつもいつしよだもの。そうでしょ」

足をフラフラとパタつかせる末星。どこか愛嬌のある仕草であいかかわらず物静かなのだが、心なしか嬉しそうに見える。

そんな彼女の髪をレイチエルが撫で、依都は遠い目をして手団扇でパタパタと自分の顔をあおぎ、南散は一瞬だけ全体像から三人に焦点を合わせて表情を和らげた。

ここに四人が収まった最後の日の画が描き上げられる。

四人のアリス

ケイヴの郊外、積層部となっている区画に立ち入るとほとんど人の気配は無くなる。住んでいるのはケイヴを維持するための労働者が主で、郊外は労働者の作業場そのものともいえる。束になったケイブルや、くたびれてきた内装を修繕するための工事場、物資を積んだ貨物輸送ルートの確保など、生活区域とはまた別種の荒くれ現場だ。

生活区域から見える天井に比べれば断然低い天井には、真新しいハロゲンランプが取り付けられており、ごみごみした無機質な暗がりを通るく照らしていた。

オイルまみれの作業着をきた機工士が、汗みずくの額を拭いながら通り過ぎていくのを、暗がりから見送っていた四人。人がいなくなった隙を見計らって、ケイヴを守る壁に近づいていく。

機械で入り組んだ通路を進んでいくと、作業員運搬用のリフトにぶちあたった。

すかさず鉄骨で組み上げられた四角い塔の中を、野太いワイヤーに通されたこれまた四方すかすかの箱が移動するタイプのもの。いかにも荒削りっぽくて乗り心地はあまりよくなさそう。

そのリフトに駆け込んだ四人だったが、それだけでリフトは動かない。入り口付近に操作盤が設置されていて、複数のボタンやコの字型のレバーが規則的に並んでいる。

「ちよつと世流。あんた機械いじり好きでしょ、なんとかできない

？」

自分達が普段利用するリフトと言えば、ある程度のセーフティ性があるもので、こんな剥きさらしの品性のカケラもない昇降機に乗るのは初めてだった。

「待つてろ。なんとかやつてみる。……迂闊に外を覗こうとするな、鉄骨との板挟みで首がちゅん切れるから」

興味深くリフトから身を乗り出していた三人は同時に顔を引っ込める。

依都はボタンの群れを指でそつとなぞる。それは機械と『対話』するときの、依都なりの挨拶なのだった。

「スピードボタンと、移動操縦桿……。簡単な機構だが、自己操作みたいだな……。未星、何階層に行くつもりだ？」

「最上階層」

「りょーかい」

彼女の即答に気楽な語調で答える。依都が一番上のボタンを押しながら、固いレバーをガクガクと揺らして溝に挟まった油の塊を砕く。するとレバーが勢いで押し倒された。

刹那、「わぁ！」と身を寄せ合っていた三人が怯えの声をあげて床に尻餅をついた。

不吉な震動と共にリフトが猛烈な速さで数メートル上昇していきなり停止したからだ。心臓に悪いこと極まりない乱暴な操作は、三人の身動きをピタリと封じた。

「よ、依都……本当に大丈夫なの？ 無理しなくていいよ、むしろ無理しないでください」

脊髄反射で未星を真ん中にしてレイチェルの肩を抱き、二人の少女を守る姿勢を取る南散。不安な呼びかけに依都は呑気に「試験運

「試験運転」と背中であつてみせる。

「一氣に行くぜ野郎共！」

生きた心地がしないまま、次の瞬間リフトがまた猛烈な速さで一気に上層を目指してのぼっていった。その勢いたるや、立っていないのに足が竦む感覚に怖気が走るほど。

「リフトの床と階層の床がずれている。依都の操作は本当に手荒だ。帰るときは遠回りしてでも安全なリフトに乗ろうね……」

軽く乗り物酔いしてぐったりしながら南散は言った。

上層部は一段とガスが籠もつてやや霞んで見える。「空」に近づいた分だけ、逆に画が大きすぎて全貌が判別できない。どちらにせよ全ての「空」を見渡せないという事実は南散の心を齒痒くさせた。全ての素敵なものに手が届かないのはすごく残念なこと。

住んでいる以上空気は必須、そのためケイヴの各所にはある程度

の空気を取り入れたり抜くために工夫された通風孔が設置されている。それでもガスの排出には追いつかない。

「うう」

未星がそのくたびれた巨大な通風孔の前で立ち止まった。こう、と獣が唸るような音を立てる金網の向こう側は真っ暗だ。まるで得体の知れない化け物が大口をあけて待ち構えているみたいに、その暗闇からは逆らいがたい野放図な暴力性を感じる。

「どう」

依都が半眼で嚴重に封鎖されている大穴を見上げた。確かにこうまでフィルターで固定されていては抜け道なんて無いように見える。

どこに繋がっているかも分からない大穴を前にして、南散はなんとなくアリスになった気分だった。自分はもう地下都市にいるが、ここから先はまたどこか別の不思議な地下世界に通じているかもしれないと、そう思われるのだ。

「だから、ここ」

トテトテと軽い足取りで未星が通風孔の一番端っこまで行き、指を指す。情性気味に追いつくと、そこには確かに穴があった。

くたびれた通風孔の端っこ、亀裂の入った建物と金属フィルターの上に、人一人が通れるほどの隙間があったのだ。しかし年季のせいだけにするには不自然だった。フィルターの一部が歪み、壁の方は若干崩壊している。

しかもその穴は、人一人と言っても小さな子供が通れるくらいの

狭さで、自分達を通るには無理がある。

指をさしていた未星の手が、肩すかしを食らってしょんぼりと垂れた。

「昔は行けたの」

「いや……昔も行けなかったんでしょ？」

南散が指摘すると、凶星を突かれて彼女は黙り込んでしまった。そうなのだ、明らかに人為的な破壊の跡がある。昔はさらに狭かったであろう隙間を、強引にこじ開けて。

「成金の天近家のお嬢様は乱暴者なんだにゃー、さすがは機械化人間（サイボーグ）だにゃーん」

嫌味ったらしく依都が後頭部に両手をやりながら、そんな軽口を叩く。未星が物言いたげに振り返ってムスツと睥睨したのを、さらに依都がニヤニヤ笑いで好戦的に受け止めるものだから収拾がつかない。

結局その場の仲裁に入ったのはレイチェルだった。

「金持ちとかそういうの関係ないでしょ。さすがにちょっと揶揄の羽目外しすぎてるわよ。未星も幾ら一部が機械化してるからってあまり無茶なことはいらないでね。それと世流、あんたのネコ語尾きもちわるい、耳が腐る」

実際、未星が半機械化人間（セミサイボーグ）というのは本当のこと。幼少時に工作機械に挟まれて大怪我をした。その際に右足を切断。手術の結果、人工皮膚に包まれた高性能の機工義肢を手に入れたのだ。他にも、部分部分で機械が生身と融合している。色々足りないケイヴで機械化手術はもちろん簡単に手を出せるレベルではない。天近家だったからできたこと。

当時、南散はまだ未星のことを遠目でしか知らず、彼女が周囲に溶け込めずに不穏な空気を買っていたことだけは覚えている。よく悪ガキ達に囲まれてつつかれていたのを見かけた。

それを見ていた南散にしてみれば、あの事故は、本当に事故だったのか、それともイジメだったのか。あの事故以来、いじめっ子達が臭いものに蓋をするように未星から離れていったことだけは事実だったが、真実は隠れたままだ。

ともあれ未星の右足はそのまま武器となる。脚力は瓦礫の塊を粉碎するほど。

フンフンとまったく反省の色が無い依都と、溜息をつくレイチエル。いじけている未星の隣に立ち、南散は彼女の顔を覗き込む。悪戯をするみたいに浮き足立った声音で、

「ね、また壊しちゃえば？」

と、提案してみた。彼女の灰色の目がこちらを見る。だから南散も紫色の目でジッと彼女を見つめ返した。

「あともうちよつとだけ隙間を広げれば入れそうだし。バレなきゃ大丈夫さ。どうせ明日には全部無くなるんだから。……あ、けど物は大事にするべきだとは思っよ、うん」

強行突破を推奨するかたわら、南散は腰部に取り付けたホルダーごと小脇のヴィヴィッドを抱き締めた。要するに、ちよつとくらい平気平気、というノリ。

未星が南散を、それから依都とレイチエルへ視線を巡らせた。みんな異論を發さない、黙って見守るだけだ。嫌味をついた依都でさえ蠱惑な笑みのまま、もう口を挟もうとしない。それはつまり、やっちまえ、という意味表示の表れ。

未星は頷き、南散にラジオを預けると、隙間から距離を取って間合いを図る体勢を取る。ピリッと、微量の緊張感が走った。神経を鋭く研ぎ澄ましていく瞬間。

固唾を呑んで見守る三人の前で、不意に未星の姿がブレた。と、思ったときにはもう少女の姿は隙間まで迫っていて、フロントステップを踏み込み、跳んだ。

未星の右足が綺麗な足刀を叩き込んだ。それが語る結果は雄弁だ。金属質なものがひしゃげる音と、セメント質の固い破砕音が派手に響き渡る。

それはもう耳を劈くような激音。

沈黙する一同の前で、未星は間髪入れず着地姿勢から今度はバックステップを踏み、後方回し蹴りでとどめをさす。ぐにやりと一瞬で金網が歪む様は溶けた飴みたいだった。

ケープがふわりと風を孕んで膨らみ、未星が着地すると同時にゆっくりと垂れる。

後に残っているのは、無残な有様を晒す拡張された隙間。破壊の余韻とばかりに、壁からはパラパラと破片がこぼれ落ちた。

青ざめた顔の三人は無言、ただ心の中で異口同音に感想を述べる。やりすぎ。

「南散、ラジオ」

催促された南散はハッと我に返り、慌ててラジオを返す。彼女のドレスが翻ったとき丁度見えたパンツのことなど、記憶と感情空間から吹っ飛ぶほどの破壊っぷりである。あれ……水玉だったっけ、シマシマだったっけ。可愛かったっけ、どうだったっけ。

先に現実に戻ったのは依都だった。彼は恐る恐る隙間の向こうを覗き込んだかと思うと、小型のマグライトを取り出しスイッチを入れる。

闇を裂く強烈な光が生まれた。

「俺が先頭に行く。しんがりは南散、お前だ。懐中電灯はあるな？」
「……。あ。うん、任せて」

とろくさい手つきで懐から細い胴回りをしたスリムな造形の懐中電灯を取り出した。

場所によっては、『空』の照明器だけでは心許ない場合があるため、懐中電灯は必需品。中には持たなくても平気という者もいるが、携帯電話よりは重宝される。

レイチエルと未星もそれぞれ明かりを取り出して、準備万端。

次々とフィルターの向こうの暗闇に入っていくのを見ながら、南散は一度ケイヴを振り返った。自分達の住む世界がある。色々と足りなくて、たぶん外の世界に比べたら圧倒的に小さな世界。それでも南散にとっては生まれ育った場所。

これから行く場所は、そんな揺りかごから抜け出した、未知の場所だ。

もしかしたら外の世界の人達に少しでも近づけるかもしれない場所。昔の人達は、どんな人達だったのだろうか。どんな世界を見ていたのか。それを知りたい。

知りたい。

改めて自分の想いを自覚し、南散もまた隙間を潜って歩き出した。
四人のアリスの姿が、闇の中に沈む。

洞窟行軍

通風孔の洞窟は広がったが、なるべく四人で縦の隊列を組むようにして歩いた。

一本道で迷うまでもなく、しばらくは左右コンクリートと緩衝材の人工的な壁が続き、足下もさほど危険ではなかった。

影を帯びるほどの綿埃や虫の死骸を見つけることはあっても、遺棄された人間の死体を発見するよりは遥かにマシだったし、ともすれば怨霊が出そうな雰囲気だったが、それに遭遇することはなかった。

ただ、風の唸りだけが洞窟内に轟く。その行き交いはさながら寓話に出てくる龍が南散達の頬を掠めて通り抜けていくようなおどろおどろしさがあった。

壁伝いに歩くので、時折心細くなった手が壁を突くのだが、そのたびに満足に研磨処理されていないざらざらした感触が伝わってくる。四つの明かりが不規則な動きで周囲を這い回っていく。

不安定になりそうな嫌に冷たい空気と狭い視野。先頭から、依都・レイチエル・未星・南散の順番で、南散からは未星の背中が見える。しんがりになると、保護欲がわくのか。

争いを好まない側にいる南散だったが、どんなことがあっても目の前の彼女の背中を守ろうと思った。ついその光景を脳内再生するに、逆に自分達が守られそうではあるが。

やがて何度目か壁に手をついたとき、自分の表情がビクツと強張ったのが分かった。

研磨未処理の人工の壁ではなかったのだ。別の意味でざらざらした、岩肌の感触。空気を多分に含んだヒンヤリした温度で、南散の手を迎えたのだった。

反射的に懐中電灯で下方を照らした。そこは整地された道ではなく、ところどころにごつごつとした岩が転がる未舗装地帯。淀んだ灰白色の床面から黒ずんだ焦げ茶色の地面が露出して、見通しの利かない先までずっと続いている。

じやりじやりと靴が土の塊を噛み砕き、そのたびに足下のバランスが不安定になる。耕作機械で無理矢理突き進んでいくような強引な足取りだ。

しかも心なしか一步一步が重い。踏みしめるたびに見えない何かに抗っているような錯覚がする。運動慣れしていない南散は少し息切れを起こした。

その答えをくれたのがまさしく先陣を切って安全を確かめている依都だった。進路上に転がる石ころや力チコチに固まった土塊を、足で軽く脇へ蹴飛ばす音がする。

「様相が変わったな、岩床に足を取られないように気をつける。それとさつきから思ってたんだけどさ、俺達って……登ってね？」

言われてようやく納得した。そうだ、この感覚は登っているというもの。逆らっているのは重力だ。

丁度、緩やかな坂道を登っている感じで、自然と踏みしめる爪先に重心が多めに入る。

「うん、この道は上り坂だから。そのうちもつと急になる。秘密の場所は、手が届きそうで届かないところにあるよ。地上に近いところにあるよ」

「ちょっと待て」

暗がりの中に未星の声が響ききる前に、いきなり未星の背中が急激に迫ってきた。いやそれは未星が近づいているのではなく、向こうが立ち止まったことで南散が激突しそうになっているのだ。

慌てて立ち止まって、抗議の意味も込めて懐中電灯を前方に向けると、依都が立ち止まった体をこちらに振り向けていた。いつのまにか行軍が止まっている。

「地上？」

不穏な微粒子を孕んだ依都の確認。その意味するところに遅まきながら気がついて、南散もレイチェルも何も言えなくなる。今よりも勾配がきつくなることにも辟易したが、それよりも重要な問題があったではないか。

登るということは、地上に近づくということの証明に他ならない。そして地上には、汚染された毒の空気が充満している。

相手の意図を察した未星が、淡々としたトーンでフォローに回った。

「私は死ななかったよ」

「つたりめえだ、てめえには人工心肺があるだろうがよ」

未星の体の中に埋め込まれている機械部品のうちの一つが、強靱な人工心肺装置だ。

昔は手術の際の一時的な代行品として活用されていたらしいが、今では弱くなったり損傷した臓器の正式な代わりとして半永久的に活動できる医療品にまでこぎ着けた。有毒ガスや埃を分解してしまえるほど人工臓器は頑丈だ。

これがあるから未星は地上に出向いて帰って来られる。毒の空気

は彼女の中で中和されてしまうから。中和できるほどには地上の毒はだいぶ弱まっているのだろっけねど。

依都はいつも未星に食って掛かりがちだが、今回ばかりは正当性を感じる。それでも間にレイチエルが入ることで、物理的なストッパー役になっているのは有り難い。

「あたりまえじゃないよ。人工心肺装置があっても、地上に行くまでは大丈夫かわからなかった。わからなくても行っただけ、そうしたら何とか帰って来られただけ。『これ』だって、完全じゃないよ、嘘じゃないよ」

未星がどんな顔をしているのか分からないが、後ろから見た仕草で、胸に手を当てたのが分かった。

「ちゃんと計測器ではかったもん。50ppmともなれば三十分以内に死亡と言われている。そして報告書にあつた当初の大気中の毒性エアロゾルの濃度は70ppm。これはもう致死量オーバー。でも長い自浄化で、濃度は1ppmまで減少してた。これはおおきな前進。人間の心肺でも長期耐久できるレベルなんだよ。南散も、依都も、シェリーも。だいじょうぶ」

「なにこのむかつくほどに徹底した説得力」

ぱーつぱーみりおん、ってなんだよ。と依都がしかめ面をしている間に、ちよいちよいと南散は未星のケープを引っ張った。少女の意識がこちらに向いたのを好機と取る。

「つまり僕らは地上の空気を吸っても死なないの？」

これまで南散はペイシエントケイヴ3は巨大な目に見えぬ魔手に包まれた箱庭なんだという印象を抱いていた。自由に行き来ができない息苦しさも伴ってしまった哀れな箱だと。

しかし未星の言うことが本当ならば。

ケイヴの蓋は開かれ、広がっていくのなら、

「簡単には。油断していると気管や肺を損傷するけど、長時間耐えられるだけの濃度まで、毒は減っているんだよ」

それはとても素晴らしいことだ。

まだ人が根を下ろすには至らないが、外に行ける可能性がある。

未星が告げた事実は、南散の心に南散自身も分らないとにかく目映い光を差し込ませた。ケイヴの淀んだ光を全部掻き集めても足りないかもしれない。

「依都、レイチエル。行ってみようよ。地上に近いところってことは、地上に出る訳じゃないんだしさ」

しかし死活問題だけあって、依都もレイチエルも渋面だった。レイチエルのイヤフォンから漏れるポップな曲がちよつと場違いな空気を作り出している。まるで今自分達がやっている行動に現実味がないことを示唆するように。

「毒ガスっていうのは重い空気なのよ。人を殺すために作られているからね。つまり地上スレスレのところに集中的に沈殿しているとみていい。……さすがにヤバイんじゃない？」

「その毒素が減少してるんでしょ？ 未星に翼があつてわざわざ上空の毒性エアなんかの濃度を調べた結果って言うなら、僕も戻った方がいいと思う。でも未星が調べたのは、『僕らでも行ける空気層』の濃度だ」

自然と未星の肩を持つ形で擁護に走っていると、未星もコクコクと頷いた。けれど十五歳組はまだ躊躇を引きずっている。が、完全な尻込みもしていない。

行ってみたいけれど危ないかもしれないでしょう、という自己保存として当然の心理でブレーキがかかっているのだ。そのブレーキさえ無くなれば、二人とも首を縦に振りたいのだと分かる。

こういう場合は誰かが背中を押すことで解決できる。だから南散

は唐突に歩き出し、未星の横を、レイチエルの横を、依都の横を素通りして先頭に立ち、振り返った。

「じゃあ僕が行ってくる。三人はここで待ってて、僕が行って大丈夫だったら呼びに来るよ。昼過ぎになっても僕が戻ってこなかったら、引き返して」

かなりの手間を要求されるが、可能性を確かめられるならやるつもりだ。依都みたいに注意深くないし器用でもないから、すぐに転びそうだがそんなの瑣末なこと。コツコツと作業に打ち込むタイプだから、我慢強いのが自慢である。

「……」

ところが南散が勢いづいて提案したのにも関わらず、彼らは数秒こちらを見つめていた。

かと思うと、依都が溜息をついて歩み寄ってきた。隣までやってきて南散の肩を叩いていく。

「そんな実験動物みたいなことさせられるかばあーか。するとしてもそういうのは俺みたいな年上に任せとくもんだ。つか、南散の足で昼まで往復できるとも思えんし」

……そんな、色んな意味であんまりだ。それに一歳しか変わらないのに。

つまりは何故か探索続行に同意した依都と、さらに続いてレイチエルの「炭坑のカナリヤにしては大澄くんは頼りないしねー」なんて苦笑混じりに言われてしまい、さらに落ち込む。

「いこ」と未星が少し嬉しそうなニュアンスで促して後続し、再び最後尾にて置いてけぼりをくらった南散は、釈然としない顔で足早についていった。

「本気だったのにい」

恐怖の大王

進んでいくごとに、確かに傾斜はきつくなってきた。最初こそ広かった洞窟は段々とその身を狭くし、それこそ一列に並んで歩かなければ通れないぐらいの小ささになっていた。

おまけに岩棚や足下の凹凸は酷くなり、油断すると転倒しそうだ。それはもう道を歩いているというレベルではなく、ごつごつした岩に足をかけて登っていくというものだ。

ただでさえ暗くて、息苦しくて、体力も使って心身共にヘトヘトだったのだが、不意に依都がゆっくりと立ち止まった。

「なんか音がする」

もはや天然の洞窟の中を進軍している形の四人。そんな汚れ傷ついた体で感覚を澄ませると、なにか冷えた空気が周囲に充満しているのが分かった。ほんのりとした冷氣には、潤いのある音まで付随していた。

岩壁に手を這わせて、南散はその不可解なものの正体を言い当てる。

「水、かな」

触れた岩壁は湿っていた。そして悪路がいつとき途切れて、少し均された空間にでた。とはいっても人為的なものではなく、これもまた天然の巡りによって岩の表面が滑らかに削られているようなのだった。

四つの光が前方を照らすと、見えたのは地面に横一文字に作られた小規模の裂傷。端から端へ横断している。その落ち窪んだ溝から、チヨロチヨロと水の流れる音がする。

「この辺には水脈も通ってるのかな。毒水だったりして」

依都がひいひいといと軽い足取りで、川と呼ぶのも烏滸がましい水の流れの前にしゃがみ、覗き込む。水路は見たことがあるが、川というものは初めて見る。

南散も溝の奥に目を凝らし、その視線は壁を這ってぐるりと天井の向こうに移った。

水は埃っぽい空気を洗い流すかのように微かな冷氣で満たし、岩の表面を削りながら僅かな亀裂の中へ休むことなく消えていく。目には見えない循環システム。

まるでこの洞窟全体を駆け巡るは血液のようだ。

それはとても尊いものに思える。

毒の空気の時といい、流れる水といい、ケイヴの外は死の世界だとばかり思っていたのに、実際に聞いたり目の当たりにする生命力に驚かされてばかりだった。

「もしかしたらこの水がケイヴの水源の一つになっているかもしれないけど、どっちにせよこのまま飲むのは危険よね。生水だし。…」

「喉乾いた人」

誰もノーリアクションであることにレイチエルは小首を傾げ、だがすぐに正確に意味が伝わっていなかったことに気付いたらしく、肩掛けカバンからペットボトルを取り出した。ここに来る前にコンビニで買ってきた飲料水。レイチエルは食料係なのだ。

「生水の方じゃなくて、こっちの水。飲みたい人いる？　ちょっと休憩しようよ」

「うい」「はい」「はい」

即座に先頭から順々に同感の挙手といえ。満場一致で小休憩と

相成った。

一番安い二八〇ミリリットルのペットボトルを受け取り、適当な小岩や岩床に座りながら各々休憩を取る。飲み過ぎてもバテる原因になるので少量に抑えた。冷たい水が喉を通って体の中に染み渡ると、気の抜けた溜息がもれた。

「そういえば……なんとなく思い出したんだけど、恐怖の大王って知ってる？」

突拍子もないレイチェルの話題。思わず南散は吹き出しそうになった。なにその陳腐な名称。

と思ったら末星は知っていた。

「しってる。ミシエル・D・Nの予言だよ」

あー……予言、と依都が至極どうでもよさそうに言葉を濁した。女ってそういうの好きよね、という呆れたニュアンスがたつぷり含まれている。南散は呆れこせないが、真に受けるほどオカルトに染まってもいなかった。

適当にそこら辺を転がっている石を弄んでいる依都のいかにも興味薄な態度を見つつ、水のせせらぎをBGMにレイチェルは語った。

「ずっとずっと昔。まだ戦争が始まってもない頃。それよりも遙か昔の予言者によって、宣告されていたんだって、『XXX年、恐怖の大王が降りてきて、地球を滅ぼすだろう』って。今よりもずっと信心深かった人達は大騒ぎ。期待と怯えを抱いてその日を待った」「でもデマだったんだろ？ 予言とかうらないとか、当てにならないねえし」

「まあその予言が当たってたら、僕らはいないもんね」

口々に言い合う男共のロマンの無さに、レイチェルは脱力した吐息をつく。そんな身も蓋もないことをと言いたいのだろう。

信じてはいないが、創作的観点から見ると降ってくるはずだった恐怖の大王ってどんな姿をしているんだろう、とは思う。ものすごく巨大な物体なのかな。

「あながちその予言、はずれてないよ。だって世界は壊滅的なまでに戦争で破壊されたし、それに私達も、もうすぐいなくなるんだもん」

「そっいうの、後からのこじつけて言うんだぜ？ 破滅の申し子さん」

いつも世界終末論を唱えている彼女に、やはり依都がシニカルな笑みを投げ掛ける。案の定木星はちよつと唇を尖らせた。が、すぐに愛らしい無表情に戻り、

「きつと明日には見られるよ、恐怖の大王」

さり気なくブラックジョークなことを平気で抜かした。

例え後光を振りまいて天空から超弩級のエイリアンだか重装甲の要塞だかが降ってくるのだとしても、自分達は地下にいるのだから見ようにも見られないと思うのだが。

流星の姿をした恐怖の大王。もうちよつと夢とインパクトがありそうなものがよかったなあなんて南散もまたブラックことを望んでみたりした。幾何学的な超合金神様とか。

想像する内にちよつとヴィヴィッドを起動しなくなっていたとき、不意に依都が「ん？」と疑問の声をあげたので、思考が現実に戻ってきた。

南散はペットボトルのキャップを閉めて、懐中電灯の光を依都に当てる。

直接明かりをぶつけてしまったので、彼の目が眩しそうに眇められた。

「ごめん、と謝って照明をずらす。」

「どうしたの」

「なんか……感触がツルツルする」

「ツルツル？」「ピカピカ？」「あんたの脳味噌のことじゃないの？」

南散が疑問系で反芻し、未星が余計なオノマトペを足し、レイチエルがここぞとばかりに意地悪めいた笑みで反撃。最後の発言に対し、南散と未星が同時に「あー」と納得。

その一連の連携したやり取りに依都が不機嫌そうに舌打ちしたが言葉の応酬は無かった。それよりも気になることがあつたらしく、手元にマグライトの光を当ててじっと観察している。

手の平に収まるくらいのごつごつした石だ。さっきから依都が退屈しのぎに手慰みにしていたやつ。どうやらただの石ではないらしく、その正体を確かめようと当てる光の角度を変えてみたりしている。

「おー、みんなちよつと来てみ。これすげえ」

矯めつ眇めつしていた依都に呼ばれ、全員が石の周りに集まった。集まってきた順に依都が見せていく。ぴったりと身を寄せ合い、拳大の石に光を当ててみせていく。

レイチエルが感嘆の溜息をつき、続いて未星が言葉も無く見入り、最後に南散が興味深く覗き込む。

暗がりの中でポツンと空間に穴を開けるような黒の塊。その石には幾つも溝が走っていた。なにも無いじゃん、と言おうとして丁度良く光が溝の中にあるものを照らし出した。

「！ わぁ……きれい」

それは南散の瞳の色と同じ、紫色をしていた。水を何十年も何百年もかけて固めたような、艶と光沢のある結晶の粒。それが溝のなかにたくさん詰まって息を潜めている。

味気ない石の中を流れる水晶の輝きは、まるで今自分達がいる水脈の通った洞窟みたいに瑞々しい涼しさをたたえていた。

光で照らされた部分の外側が紫色に光り、その中心から白んだ部分が幻想的に煌めくさまは見てて飽きず、星が懷に温めていた大事な何か……ブルーグレイスが抱く星色の部屋をちよつと見させてもらっている気分になる。

この石は図鑑で見たことがあり、それを参考に画を描いたこともある。でも実物を見たのは初めてで、あるとも思っていなかった。

「これ……たぶんアメジストの原石だよ。水晶の中では一番高評価なんだ。昔はよくこれを研磨したりカッティングしたアメジストを、ペンデュラム（振り子）にしてお守りにしたんだって。人生において進むべき道から悪酔いを防ぐって意味があったとか」

その他にも天然石のペンデュラムは、水脈や鉱脈を探し当てる道具にも使われたらしい。恐怖の大王みたいな現実味の無いものとはともかく、こういう類のものには割りと惹かれた。

なんでこんなところに、と続こうとした言葉は、後から思いついた言葉にすり替わった。

「もしかしてここ、アメジストの鉱脈なんじゃない？」
「あつた」

とか言ってる傍から未星が別のアメジストの原石を見つけてきた。それを見たレイチエルも、それから南散もごつごつざらざらした岩に手を這わせ、意外にあつさりと原石を発見。それぞれ照明を当ててしばらく見とれていた。

先達者たちの世界大戦で枯渴していたとばかり思っていたのに、

地中深くにはまだこんなに綺麗な星の結晶が埋もれていた。またはこの長い時間のなかでゆっくりと育まれてきた賜物なのかもしれないかった。

「人生の悪酔いを防ぐ、ね。これ持ってたなら、明日は世界滅亡から救われるかな」

依都のボンヤリとした呟きに、すぐには誰も答えなかった。言わなくても分かっていたから。それでもこの原石に出会えたことは、まったくもって無駄とは思わない。

「私達がこの冒険を無事に終えられるように。それくらいの効力は発揮してくれるんじゃない？ 面白いものに出会わせてくれるかも四つもあるんだから、四倍分のパワーで守ってくれるよ、きっと」そう言ってレイチエルは拳よりも一回り小さい、自分で見つけた原石をポケットに入れた。可愛いものや綺麗なものが大好きなレイチエルはともかくとして、他の二人はどうするんだろうと様子をうかがってみる。

未星は飽かず眺め続けて離そうとしなかったし、依都も結局ウエストップに収納した。

南散もまた小振りの原石を見つめる。自分の目の虹彩とおそろいの綺麗なアメジスト。

みがかれる前のありのままの星の欠片。

……願わくは、カップラーメンの三分ぶんくらいは、長く僕らの時間が続きますように。

額に当てて目を閉じ、星をお願いしてみた。本気でそう願った。

惑星の眼差し、惑星の溜息

それからまた険しい洞窟の中を登っていったが、不思議と重たい疲れに苛まれることはなかった。足場の悪い小さな岩棚に足をかけて、時に手を貸しあいながらまだみぬ場所を目指す。

もうここまでがんばったんだからいいよね、と思うことも結構あったのに、そのたびに、あとちょっとくらいはがんばれるかな……、という意欲に突き動かされたのだ。

もしかしたらアメジストの力が働いたのかもしれないと、南散は思考の半分で考えた。

惑星の外から輸入されてくる石で、パワーストーンと呼ばれて所有する習慣は今もある。

昔はそれこそこの星で採掘された色んな星の欠片を、お守りにしていたそうだから。それだけの価値はあり、気持ちばかりでも疲れや沈んだ心を癒す気脈が秘められているのかもしれない。

けれども手袋もしていない素肌をさらした手はすっかり傷つき、感覚が薄くなっている。服もきつと汚れまくっていることだろう。

お世辞にも自分達の着るものは上品ともとびきり清潔とも言い難いが、それ以上のひどさ。特に洒落好きのレイチエルはとくに文句を言ってもおかしくなかった。

しかしここまでできて珍しく誰も文句を言わず、ただ上を目指して登っていた。

時折咳き込んだり、耳がキーンとなったりするのは未星が言うところ

ころの気圧の変化らしい。咳はともかく耳の中が変に膜がかったように聞こえたり締め付けられるように痛むのは気持ち悪かった。

生まれてからずっと地下都市で暮らしている南散には初めてのことで、「空気を飲み込むか、こうやって鼻をつまんで鼻息を出そうとしてみて」と未星から対処を教わるまで三人とも気圧の居心地の悪さにクラクラしていた。

だがそれは段々と目的の場所に近づいている証拠でもあり、不思議な連帯感が四人を包み込んでいる。ここまできたらあとは行くしかない。どんな悪路だって乗り越えてみせると、本当の冒険家になった気分。

どれくらいの時間がたっただろうか、急に道が段差のない勾配が少しきついただけの坂道になった。ザクザクと地面を踏み付け、一步と踏みしめていく。今までに比べたら随分と楽な道のり。

そのとき先行していた依都がゆっくりと立ち止まった。今度は依都達の姿が見えていたので、南散も驚かずに一緒になって立ち止まることができた。と、ここまで考えて違和感に思い当たり「え」と小さく声がもれる。

長いこと登り続けて距離感覚に慣れたせいかな？ いや、違う。

南散はそれまで自分達の冒険を大いに支えてくれた懐中電灯の明かりを、消した。

それでもまだ三人の姿が見えている。ボンヤリと闇の中に浮かび上がって鈍色にびいろの輪郭が洞窟内に溶け込んでいた。のみならず、周囲の洞窟の様相まで何となく分かる。

ねえ、と誰にともなく声を掛けようとして前方を見たとき、南散は声を飲み込んだ。

何も言わず依都が少し脇にどくことで、四人が一斉に見ることができたのは、暗灰色の先の先、見たことが無いほど真っ白な一本の裂傷だった。

まるで染み一つ無い白紙を貼り付けたような裂傷から、よく見ると岩壁が僅かに照らされ、自分達の姿も照らしてくれている。つまりあれは光であり、照明器なのだろうか。

光って、黄ばんだ古いものじゃなかったか。あんなに純粹で、他になにも見えなくて、ちょっと怖いとも思えるくらいの純白の明かりがこの世に存在するなんて。

「あの先に、本当に世界って続いていると思う？」

「未星が行ったぐらいだから、続いてんだろうよ。……たぶん」

いまいち頼りない返答を寄越した依都は、それから意を決したように歩き始めた。レイチエルがちよっとためらって、けれども怖いもの見たさで後続する。未星は、なにを考えてるかわからないけど。

木のトンネルを抜けたアリスも、こんな気持ちだったのだろうか。不安で、怖くて、でもちよっとドキドキする期待が心の奥で踊っている。

歩くたびに裂傷は近くなり、周囲の空気が心なしかキンと清らかな光を前に張り詰めていた。漂う埃がキラキラと輝くほど、明かりは段々と強くなる。

途中から逆に向こう側に向かって僅かに傾斜になっていたので、自ずと足が速くなった。

そして巨大な『出口』にいいよ迫るかといった瞬間、

「!?!? いったってえ……!! 目が痛い……!!」

先に出口を潜り抜けた依都が苦悶した。目を押さえて出口の脇へ

よろける。南散がアクションを取ろうとするそばから今度はレイチエルもまた「ひっ……」と、目頭の辺りに裏手でヒサシを作り、出口から向こうに行けないでいる。

「え、……え……？」

まるで本当にヴァンパイアのようにひるむ二人を見て、南散は知らずと一歩後退った。その拍子に背後の岩床に生まれていた突起につまづき、後ろにたたらを踏んで倒れる。

我ながら無様だな、と苦々しく思っていたら、ポケットから何かがこぼれた。無意識のうちに頭の中で推理公式が生まれ、見るまでもなく正体に気付いていたが実際にそれを目の当たりにすると適切な対処ができなかった。

「あー……！」

不細工な形をしているとはいえ、全体的に丸みのある形。

傾斜に沿ってゴロゴロと転がっていくアメジストの原石を、南散は置いてかれた子供のような声をあげて見ていた。よりもよってなんで落としちゃうかな自分。さらになんでまた出口のほうに転がってっちゃうかな原石。

しかもそれまで立ち尽くしていた未星まで出口の向こう側に颯爽と歩き出していくではないか。もし有害な光だったらどうするつもりだろう、前に未星が行ったときは大丈夫だったかもしれないが、それが今も大丈夫であるという保障はどこにもない。

「まってよ！ いっっちゃダメだ！」

ぶつけてはいないが、一応ヴィヴィッドが壊れてないことを確かめて、南散は思いきって立ち上がり、光の向こう側へと飛び込んだ。ほとんど勢いだった。

瞬間、目に針を刺したような痛みが走り、南散もまた例に漏れず目を押さえてその場にうずくまった。空気の流れからさつきまでとは違う広い空間に出ただけは分かったが。

なんだこれ、眼球をえぐり出したいくらい痛い。

視神経という視神経が一気に収縮するかのような絞られる感覚。その痛みは脳まで届いて悶絶させる。目を閉じても瞼の裏がチカチカした。

「死んじゃうのかな……毒が回ってきたのかな……」

痛みによる生理的な涙は、閉じた瞼のあいだから覆う手を濡らした。もしかしくとも血なんじゃないかと心配するくらいあたたかく湿っている。

「毒のせいじゃないよ。光に目が慣れていないだけだよ。痛みが引いたら、まばたきしながらゆっくり目を開けてごらん。だいじょうぶ、こわくない」

こんなときに降ってくる末星の幼い涼しげな声が、天使か妖精みたいな超自然的な導きを秘めているように聞こえる。不思議の世界へ連れて行ってくれる鍵のような抑揚。

数分経ってからようやく絞られる痛みが引いてきて、言われたとおり恐る恐る目を開けてみた。ゆっくりと空間に馴染ませながら。

初めて見えたのは地面だった。ごつごつした岩場で、これまでと同じ均されていない天然の岩盤である。それから手前にあるのが自分の両手。涙で濡れて、透明な水の艶を放っていた。

それらが今までに見たことが無い種類のスポットライトを浴びて、淡く存在を主張している。照らされた岩は鮮やかな色に輝き、濡れ

た両手は少し青みがかっていて、図鑑で見たアクアマリンに天使の後光を与えたらこうなるんじゃないかという輝きをしていた。

周囲を見回すと、直径三十メートル程の洞穴であると分かる。全てに全て光が降り注いでいる訳ではなく、暗がりには目玉のない眼窩のように落ち窪んでいた。

隅っこの地面はなだらかに弧を描いていることから、丁度アイスクリームディッシャーでくり抜いた形がこの空間の形状らしい。

ここがアメジストと水脈の洞窟の終着点。

そして何より目を引いたのが、その狭くも広くもないポツカリとあいた空間に、すっかり埃を被って横たわる巨大な機械の人工物だった。

天然で形成された場所にあつて本来は場違いなはずのその存在感は、一体どれほどこの場所と時を共にしたのか、すっかり馴染んで景色の一部として風化している。

見た目にはロケットのように見えた。丸みを帯びた尖端をしていて、胴体にごちゃごちゃとケーブルやら剥きさらしの機関部やひしやげたカウルが残骸として付属している。

長さは六、七メートル、垂直幅は三メートルほど。意外に小型なのもかもしれないが、人間と比較してもそれは巨大な代物だ。メタリックな軽装甲の表面は鈍い銀色だが、埃をかぶったせいでほんのりと薄茶がかつた光を帯びている。

時間が停滞したような錯覚、生きていた何かが長い眠りについて動かなくなった。このロケットみたいな機械の周りは地盤が不自然に削れているので、墜落したものと思われた。

啞然と観察していたら、ふと誰かの手が目の前に差し出された。

その織手にはさつき落としてしまったアメジストの原石が収まっている。

「これ、おとしたよ」

「あ、うん。……ありがとう」

受け答えやら受け取り方がずいぶんこの場において調子づばずれなものに思えてくる。それは自分の心がまだこの空間に順応していないからだ。

少し顔を上げると逆光を背にした女の子がいた。くすんだ水色の髪に灰色の瞳をした、世界終末論を唱える女の子。明日世界が終わるから、今日を楽しく生きよう。

くつきりとした美しい陰影と、逆光による彼女の白い肌の輪郭が放つ柔らかな輝き。本で色んな知識を集めようとする自分とは違う方法で、自分よりも肌身に世界を知る少女。

普段は起伏のない彼女が、ちょっと泣きそうな顔をして微笑んだ。「まತ್ತてた。みんながここにくるのを、ずっとまತ್ತてた。——ようこそ、秘密の場所へ」

そう言つて未星がゆっくりと下がっていく。入れ替わりに遮るものを無くした光が南散へと降り注いだ。

その光に魅入られるようにして、ゆっくりと首が痛くなるほど見上げる。

「——」

息を呑むほどの美しさ。

何百メートルも遙か上、そこに断裂した穴があいていた。目映いばかりの白い塊が満ちていて、そこから心がざわめくほど澄み切った優しい光が差し込んでくる。

それはまさしく暗闇に咲く花であり、希望という言葉ではなく、
ないくらの壮観な惑星の眼差しだ。漂う空気は惑星の溜息で、照
らされた空気の層が輝いて青みがかったベールを作り、キラキラと
カーテンのように揺らんでいるのだった。

どんな照明器でも作り出すことができない次元の明るさ。手を伸
ばしても絶対に届かないもの。

目を離すことができない。揺れる紫の瞳が痛くなるほど見開かれ、
乾くまいと涙腺が雫を眦にためはじめても。

初めて吸う心が洗われるような冷たい空気。初めて浴びる本物の
白光。

かつて全盛期時代の人の誰もが手にしていたもの。惑星の姿の一
部。

これが、外の世界。

レターボット

目を慣らして体勢を整えた四人の子供達は、恐る恐るスポットライトを静かに浴びる人工物へと近づいていった。これが木星の言うところの昔の人のもの。今まで地下開拓団の人達ですら発見できなかった、未知の産物だ。

初めて見るテクノロジーの詰まったオブジェクトを前に、四人は放心する。

「宇宙船……？」

不発弾のようには見えなかった。ロケットと言っても何かが搭載されているタイプのもに見えるのだ。表面をなぞると、指の動きのあとにざらざらした砂の航跡が残る。南散は思いつきで適当にイラストに入れるのと同じサインを描いて遊んでみた。

最もこの機械の人工物に興味を示したのは、機工士の端くれである依都だ。ロケットみたいな何かが沈黙しているのをいいことに、漁るハイエナのように調べ、分析する。

「飛行機のパーツ、かねえ……これ。形状からして乗り物に固定できるような設計だし、これ単機では動かない。周りの状況からすると、どこかでパージされて墜落してきたんじゃない？」

「パージ？」

この場を代表してレイチエルが頭痛をもよおしたような顔で聞き返す。

「排除とか浄化って意味の言葉。この場合、部品類を本体から切り

離すことだ。このパーツは、万が一のためにいつでも飛行機か宇宙船から切り離すことができる造りになってるんだよ」

ふーん、といまいち氣の入っていない相槌をうつレイチエルに構わず、各々調べたり眺めたり。眠る巨人とその小人みたいだった。秘密基地にできそうだが、それにしてはちょっとばかり行き来に苦勞する場所だ。

と、南散は堆積した埃に画を描いて遊んでいたが、その指先が止まった。目を凝らしてなぞった痕を観察すると、なにやら埃の下から銀色とはまた別の濃紺色が覗いている。

しかもどうやらそれらは図柄かなにかで、その一部が現れたらしい。

お絵かきで遊ぶのをやめて、片手で思いつきり広範囲を拭う。手の平が砂埃まみれになって煤けた色になったが、それよりも目の前のものに意識は奪われていた。

「みんなちよつときて。これなんて読むか分かる？」

注目を集め、近づいてきた三人が南散の脇から目の前のものを見つめた。

それは文字だった。ゴシック体のエレクトリカルな雰囲気を漂わせる文字列が銀色の表面にプリントされている。この機体を表す本物のサインだろうか。濃紺の文字はなんと読むのか、南散は頭を悩ませた。レト……レタ？

「僕らの知ってる文字とはちよつと違うね。これはグリシエ語に近いのかな」

南散達の世代に浸透している主流の文字はグリシエ語と、ヤパ語

と呼ばれるまったく趣の違う二種類。前者は比較的簡単な規則性を持っていてので修得しやすいが、後者は少々複雑な文字の組み合わせによって構成されるぶん語彙が豊富だ。

南散、依都、未星という名前はヤパ語からきており、対するレイチエルはグリシェ語からくる名前。さらにブルーグレイスも含めた星系圏の宇宙公用語も含め、三種類が絶妙にミックスされて今の文字文化を築き上げている。

依都が顔を近づけ、そつと文字の表面を撫でた。その瞳は相手の存在を酌み取り重んじる真摯なものだった。機械と対話するときのくせ。まるで機械の心を読み取るようだ。

「なんとかかんとかバード・レターポッド……。そうか……。！」
それから依都は一人得心するとなにやらロケットの表面に手を這わせはじめた。何かを探り当てようとする仕草に、置いてけぼりにくらった三人は啞然とするしかない。

「なにやってんの？　これがなにかわかったの？」
一人で先を行かれるのがちよつぴり悔しかったので、痺れを切らした南散が問いかけた。

依都は、ああ、と冴えのある応答。
探す手を止め、コンコンと銀の装甲を叩く。

「これはレターポッドだ。むかし、全盛期時代の飛行機に積載された簡易の格納庫でさ、このくらいの大きさと恐らくこのポッドを装備していた飛行機は小型。墜落してもここまで形状が保たれているところを見るに南散の言うとおり宇宙船だと思う」

興奮気味に分析結果を語る依都は、不意に三人からの視線で我に返り、少しきまりが悪そうに頬を赤くさせて話題修正。

「えっと、まあ、つまり……。このレターポッドは色んな物を収納す

るカプセルなんだよ。燃料や武器、その他の物資なんかを詰め込むためのな。だから未星の『宝』って形容も間違いないかもしれない、もしかしたらこのなかに全盛期時代の物資が残存している可能性がある。昔の遺物だから期待しない方がいいとは思うが……期待しちまうよな」

たしかにここまで言われて期待するなというほうが無理だ。

未踏の地で忘れられ何百年も昔から眠り続けてきた全盛期時代の宇宙船レターポッド。

そのまま消えゆくはずだった遺物は、最後の最後で自分達に見つけられた。

それが果たしていいことなのか、悪いことなのか分からないが。なんとなくこのレターポッドを見てみると、待っていてくれたような気分に胸が一杯になるのだった。

「一緒に探してくれ。たぶんこの装甲のどこかにハッチがあるはず。レイチエルと未星は破損したカウルのあたりには近づくな、そこは俺と南散が調べるから」

てきぱきと指示を出し、誰よりも活き活きとした様子で中と繋がる入り口を探す依都。それに触発されてこっちまで心が躍るほどだ。一人、また一人と行動を開始し、みんなでレターポッドを調べ回す。

突き出た配管に気をつけながら、ひしゃげたカウルの辺りに入念な視線を巡らせた。どんな素材で作られているのか、宇宙航行に耐えるものだからか今にも崩れそうな脆さ、というものが無い。

ひしゃげたまま時を止めて凍てついた、という感じだ。ピクリとも動かない。

上手いこと足場が作られ、このまま登れそうだ。南散はソワソワした気持ちで周囲を見回した。みんな口々に、無いなー、と言いな

がら調べることをやめていない。

危ないところは男性陣が調べると依都も宣言していることだし……。

恐る恐る足場として見当をつけたところに、足をかけた。さすがにカウルが軋んだが、許容範囲レベルの軋みだ。崩れる気配は無い。だからそのまま一つずつ登った。

意外に三メートルの婉曲気味に張り出た壁は手強い。

突き出た部品に神経を使いながら、重力にさからっていくのは好奇心だけでやっちゃいけないことも、と後半に差し掛かったところまできてようやく後悔してきた。

気分の問題か、砂埃をかぶったレターポッドをいじっているせいか口の中に砂混じりの粘液がたまっている感じがする。思ったいじようにコレは汚れているのだ。

我慢、我慢。最後の……一段！

心の中で掛け声を放つと同時に力を入れて、頂上に身を乗り上げた。

緊張から解放された溜息が、口から盛大に吐き出た。

やればできるものだと思分に感心する。いまさら服が汚れても気にならない。

仰向けに横たわったことで、外の世界の一部、白く塗り潰された高みから降り注ぐ光を全身で受け止めた。独り占めしているようでなんだか嬉しい。このまま時間を全部止めて、ずっとずっと永遠の果てまで過ごせたら……と、ちょっとだけ望んだりもした。

ここで沈黙しているレターポッドも、僕らがくるまでそんな気持ちだったのかな。

だが現実という世界が容赦なくうつとりした南散の目を覚ます。吸い込んだ埃に鼻腔の奥をくすぐられ、くしゃみをした。こんなことをしている場合ではなかったのだ。

自分の体を腫れ物を扱うようにして体勢を整える。うつぶせの姿勢で改めてレターポッドの頂上に視線をやった。

円筒型かと思いきや、南散が這いつくばっている面が、丁度胴体の途中から微妙に平らになっていた。不安定さが幾分か取り払われているからこそ、寝そべることができる。

へこむとしたらどっちかというと今地面にめり込んでいる方の胴体面だろう。なぜなのかと南散は疑問に思った、そしてそれは往々にしてなんらかの兆しとなるのだ。

ゆっくりと立ち上がり、とすれば両脇の三メートルの奈落に足が竦みそうになりながら歩き出す。コツコツという大して響かない小気味の良い音がした。装甲が分厚いためだ。

尖端近く、平らな面が終わりかけたところまで歩き……足を止める。

南散の目はじつと足場に注がれていた。他と同じ埃をかぶっているだけなのに、どこか違和感が拭い去れなかったのだ。膝をつき、すっかり汚れきった服の袖口で埃を拭う。

「あ……」

現れたのは矩形くけいに走る線のように細い溝。そして頑丈に閉ざされた三メートルの蓋。ハッチだ。

これは推測だが、平らな面にハッチが付属していたのは偶然ではないかもしれない。なんらかの意図があった設計なのだろう。こう

して上向きに落ちてきたのは偶然だろうが。

開くかな。

一抹の期待を込めて、少々複雑な構造の広い取っ手に両手を引っかける。

力を込めて引っ張ってみるがこれがビクともしない。ためしに押してみたがうんともすんとも言わない。

当然ながらハッチの開閉がロックされていた。南散の結論は一つ。こういうときは機械ハカセの依都くんを呼ぼう。

「依都ー！ ハッチ見つけたー！」

しかし向こうのほうはこちらの位置を特定できていなかったようで、十秒ほどの沈黙のあと、「あれ？ 南散は？」「そういえばいないわね」「上から聞こえたよ」という会話が聞こえてきた。

まるで自分が奇術師になって消失マジックをしたみたいで、ほんわかする。

「上、上！ ポッドの上にいるんだ。カウルから登れるから、きてくれる？」

なにやら下から、「未星はだめよ！」「うー」「レイチエル、こいつ押さえてて」といった軽い揉め事が交わされたあと、一人だけ登ってくる気配がした。しかもあれだけこっちが苦労して登ったのに割りと容易く。

「やつとついた、つと。……なんだよお前、そんな目して」

「……いや別に」

ズケズケと歩いてくる依都から、敢えての視線逸らし。

ポッドの胴回りの幅が三メートルほどあるだけあって、隣り合っで並ぶことができる。が、やはり南散はすぐそばが断崖絶壁になっているのは落ち着かなかったので、それを避けるようにハッチを挟んで向かい合う位置を取った。

「これなんだけど…… ロックされて開かないんだ」

「そらそうだよな、墜落してきたんだろうし。だとしても、でかした。こんなところにあつたなんて思いもしなかったぜ」

そのさり気ない賞賛が南散を喜ばせていることなど露知らず、というより依都の関心の大部分をすでにハッチに向いている。

依都はハッチの取っ手部分、凹凸の細かい所に触れた。もちろん簡単には開かないようになっていいるだろうが、依都ならなんとかしてくれる気がしていた。

「それほど複雑な機構じゃないっばいな……。これでパスワードとかかけられてたら面倒だけど、それらしきセンサーもパネルもない……」

「じゃあどうやって開けられる？ 電子的なものでロックされていないなら、僕らでもあけられるんだよね？」

「コツがいる。南散、手を貸せ。取っ手のフレーム、ここ…… そっちじゃない、ここ、そう、そう。これと一緒に取っ手を押し込むように掴んで、引っ張る。分かった？」

「意外に単純なんだね」

「単純な仕掛けで、より強固だったり便利な利器を開発するのも一つの技工だったから。たぶんこれで開くはず。これを昔はオートでやってくれる機械が搭載されてたんだな、今の俺達の人力で開くかは、わからんね」

そう言いつつ、組み合わせた腕の筋肉をほぐしている依都はやる気満々だ。

それぞれハッチの左右に回り、大きな取っ手に手を掛ける。言われたとおりに押し込んだとき、確かにロックが解除される手応えが伝わってきた。これはいけるかも。座る位置が断崖絶壁に近くなつたことなんか気にしていられない。

全ての力を引っ張る臂力に回して、依都とタイミングを合わせて同時に引く。

引っ張っているのはこっちのほうなのに、逆に引っ張られているような錯覚を抱いた。それほどまでに扉は頑健だった。

二人とも顔を赤くして、手が白くなるほど力を込める。

そのうち歯を食いしばっていた依都から、絞り出すような声があった。血管が切れるんじゃないかというくらい、奈落の底からギリギリとよじ登ってきたような声だった。

「根性みせろー……！ 負けたらヨダレキスの刑ー！ はいウイステイリア組、ファイトー！ 清楚が売りのウイステイリアー！ まーけーいーぬーこーんーじょー！」

「うわなつかし。……まーけーいーぬーこーんーじょー！ オーエス！ オーエス！」

かつて子供教室に通っていた頃、別クラスに体格が豚そのもので体も性格もブスというとてもないスペックの怪物女子がいた。

影で通称ピッグメンと呼ばれていたその女子は、男食いで有名なボーイクラッシャーで、捕まればヨダレのキスで人生終わると男子のあいだで戦々恐々と囁かれていたのだ（しかもそういうヤツに限って、女子からの持ち上げがハンパない。おかげでピッグメンは山の大将気取りだった）。

運動会の綱引きでそのピッグメンの在籍するクラスと対決したのは、当時の南散たちが所属するクラス・ウイステイリア組。

彼らもまた例に漏れず、ケイヴの玄関に敬礼し血の涙を流す勢いで戦に臨んだ。

その時の味わい深いながらも決死さの感じ取れる掛け声がそれなのだった。巻き込まれた女子は立場上たまったものではなかっただろう。

もしかしたら、その時の火事場の馬鹿力とピッグメンの恐怖が今になって後押しになったのか。脳裏では珍しくトンヅラを慈愛の笑みに染めたピッグメンが浮かんでいたが、なぜかありがたみより怖気の方が勝っている。

しかしその甲斐あつてかさらに手応えがあり、微々たるものだがハッチが開き始めた。こんなところにまで影響を与えるなんて、ピッグメンこええ！ おお、犠牲になった男子達に栄光あれ。

「このハッチが開かなければピッグメンに追いつかれるこのハッチが開かなければピッグメンに襲われるこのハッチが開かなければピッグメンと強制結婚する……！」

「うおおおお我が英雄男児達よ立ち上がれー！」

「……なにやってんのあんたたち」

呪詛のように唱えて暗示的強迫観念をエネルギーに変えていた依都と南散の背後から、呆れた声が飛んできた。少しだけ力を緩めて肩越しに見ることを許す。

そこには下で木星を足止めしているはずのレイチエルがいた。

ボリウムを小さくしているのか、はたまた起動していないのか、イヤフォンをつけたままだが音楽プレイヤーから音は聞こえてこない。

なぜか髪がボサつき、疲れているように見える。見境無き炎熱に当てられて逆に冷えてるよと言いたげなテンションの低さで、どうやらあまりのテンションの温度差に茫然自失しているらしい。

が、彼女はなんとか気持ちを奮い立たせて溜息をつく。

「犬山（イヌヤマ）さんの脅威をいつまで引きずってんのよ。そりゃあ……あの人一時期歯止めがきかなくなっ手当たり次第に男子

を抱きしめてたし、その被害者の中に大澄くんと世流もいるって知ってるけどさ……」

「おまえにはわからんだろう、あいつに抱きつかれ……いや、タツクル……いや、獣のごとく飛びかかれたときの衝撃や体臭やブヒブヒと名前を呼ばれる諸々のおぞましさだ。それはともかく、未星のお守りはどうしたよ」

「がんばったわよ、でもダメだったの」

ボサついた髪を手櫛で直しながら、レイチエルがげんなりと二人の少年の前方を指さした。その指先を辿って二人の少年が前を向き、「うおう!？」と異口同音に驚愕する。

感嘆疑問符を飛ばした少年達の前に、いつのまにワープしたのか未星がしゃがんでいた。まじまじと蟻の行進を眺めるかのように開きかかったハッチに視線を落としている。

それからおもむろに未星のもやしみたいに細い手が開きかけのハッチに掛かる。南散と依都が引く側に回っているのに対し、対極の位置にいる未星は押す側にいた。

「シェリー、こっちにまわって一緒におして」

うん、とレイチエルが軽やかにハッチを飛び越して未星の隣にまわった。引つ張る少年二人と、押す少女二人。双方の力が発生してハッチを押し広げていく。

少しずつ、少しずつ。腕の筋肉がしばらく笑って使い物にならなくなってもやめない。

四人のアリスの旅はこんなところで終わりはしないのだ。不思議の世界へ旅立ち、そこで暮らしていた古の人達の痕跡を見るまでは。グッ、グッ、とハッチが根負けして装甲の戸袋に滑り込んでいく。それはさらなるモチベーションとなって子供達の士気を高めた。

高めすぎた。

「あ。未星！ ちょっと」

思わず南散が呼び止めたが、効き目はなかった。人が身を丸めてハマれるぐらいまで間隔があくと、いきなり未星が装甲とハッチの隙間に仰向けに身を沈めたのだ。しかし華奢な彼女ですらまだ潜り抜けられない。

当然、未星の体はつつかえたがそれが狙いだった。

未星は靴裏をハッチの突端へ蹴り付け、つつかえ棒のようにして身を固定すると、精一杯身を伸ばし始めた。安定した力点により、格段に開きやすくなったが。

「おい！ パンツ見えてるよ！ 仕舞えこら、こらあ！」

大胆な体勢により、もれなく彼女のワンピースのスカートがまくれ上がり、絶対領域が丸見えになってしまったのだった。やっぱ水玉だった。

喚く依都に、南散は同乗する。女としての恥じらいがないのかこの娘は。

……ないからこんなことができるんだな。

機械化された右足のいかんき発揮。目に見えてハッチが装甲の中に消えていき、限界を悟った未星が素早く登ってきた。これ以上はつつかえを無くして落ちてしまうからだ。

今度は四人全員が一方向から力を合わせて引っ張る。一心になって、意地になって。

やがてそんな猛っていた者達を止めたのは、レイチエルだった。不意に力を緩め、取っ手から手を離して四つん這いに突端からハッチの隙間を覗き込む。

いや、それはもう隙間ではなかった。

「……開いた！」

その一言で、全員がぴたりと動きを止めた。

どっと疲れが押し寄せてきた。ジンジンと赤くなつて痛む手、その手を起点として体をめぐる熱が何故かこちよい。

レイチエルに倣つてのろのろとハッチの突端から覗き込む。未星が、依都が、南散が。

秘密の扉が開いていた。その向こうはポツカリと暗がり、沈んで隠れている。アリス・イン・ワンダーランドの挿画にあつた木の穴と情景が重なつた。

その穴に上からブルーグレイスの砂色の光がやわらかく差し、まだ見ぬ世界へ繋がっているように見える。

それはきつと待っているのが絶望でも希望でも他のなにかでも、たぶん後悔しない世界だと、南散は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8472y/>

Last Innocence

2011年12月25日20時58分発行